

新註
白隱法語集

内容
夜遊假辻主坐里安實見施
船羅名名名名名名名名
天談引歌談談談談談談談
丸記き讀歌談談談談談談

261
851

019562-000-0

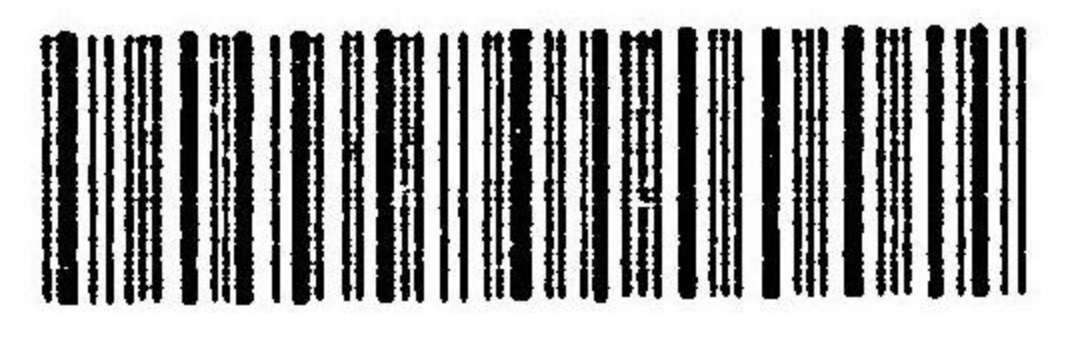
特61-28

新註白隱法語集

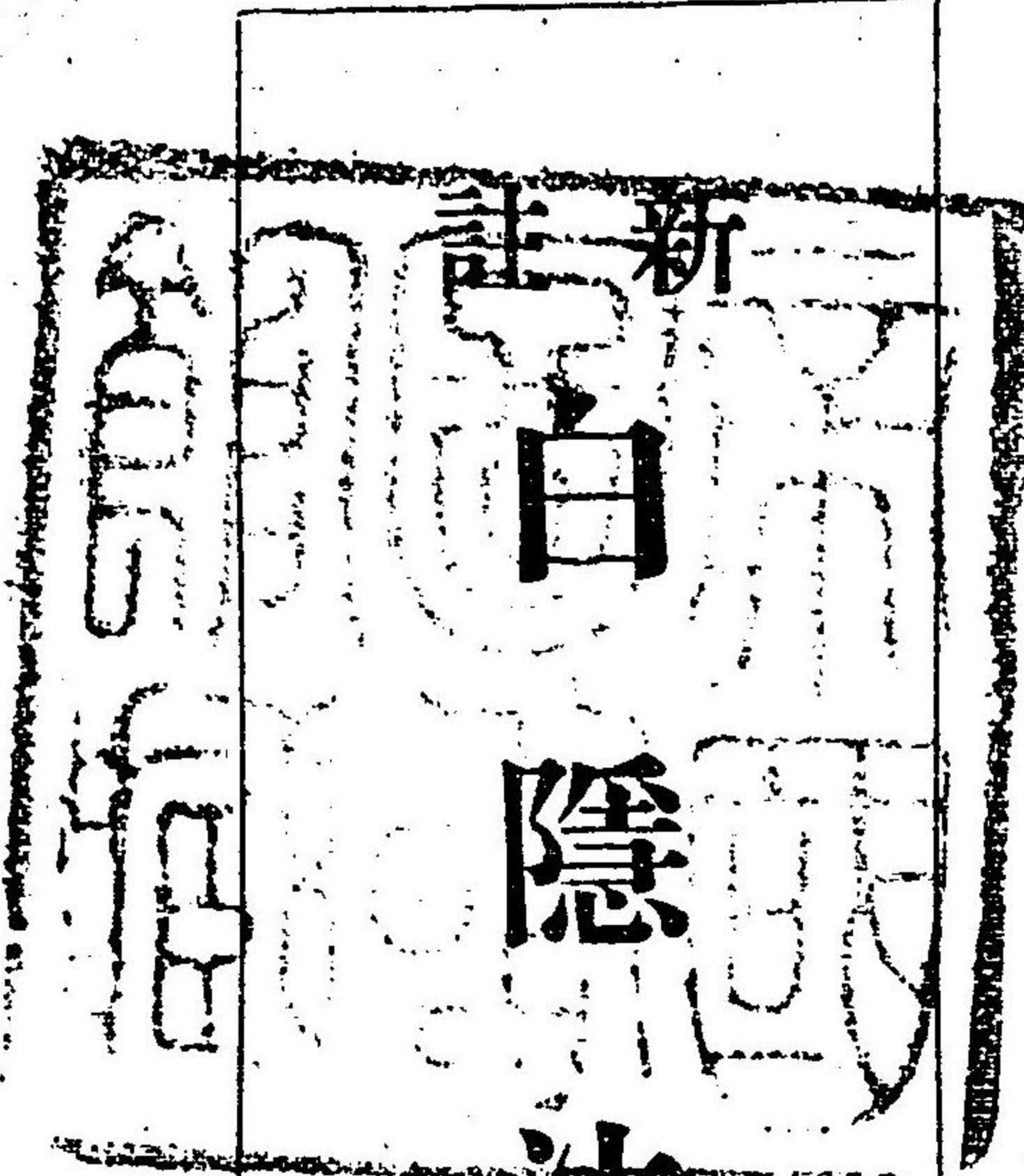
石上 学人/編

M44.2

ABG-0336



特 61
28



新註
白隱
法語集

明治
44. 2. 16
東京

偶 成

白 隱

觀_二察世間塵勞事_一 縱天子有_レ不_レ任_レ情
可_レ貴自性本有月 未_レ撥_二雲霧萬事成_一

白隱禪師略傳

白隱禪師諱は慧鶴、鵠林と號す。幼名を岩次郎と云ひ、姓は杉山氏、貞享二年十二月二十五日、駿河國駿東郡原驛に生る、十一歳の時、一日母に隨ふて驛の源經寺に詣て、たま／＼地獄の説法を聽きて、棘然として深く怖れ、これを縁として元祿十二年二月十五日佛涅槃の吉日を以て出家したり。爾來修養多年、具さに風餐露宿の辛苦を嘗めて諸方の先覺に歷事して得る所あり、道成りて中年以降、聲譽漸やく聞わて門下に參する僧俗彌々繁く、化を洽く布いて當時いたく衰へたる禪風を興隆せり。明和五年戊子十二月十一日曉旦、八十四

歳を以て伊豆の龍澤に示寂す。後世日本禪宗中興の祖とも稱せられ
明和六年六月八日、天皇畏くも神機獨明禪師の諡號を賜ひ、明治十
七年、今上帝復た諡號を正宗國師と宣下し給ふ。

例 言

一本書は白隱禪師の法語中、最も世に知られ且また禪師が初心の求
道者の爲めに著されたる通俗平易の法語十三篇を集めて冠するに
註解を以てせり。

一既に禪師が初心の徒の爲めに物せられたる法語に註解を附するが
如きは屋上更に屋を架するが如くなれど、由來禪門の用語の難解
なる、其常套語といへども門外の士にありては異國の語に接する
思あらしむ。本書は曾て此思に困しみたる一門外漢が、先人の指
導に依りて法語中の禪家常用の熟語及び一般佛教の専門語に就き

て可成普通人に解し易しと思はるゝやう註解を附したり。
 一禪師の著書は今や餘す所なく刊行され、本書中に集むる所の如きも亦た世に數種の刊行本を見るものなれど、始めて禪師の法語を窺ふ初心の人には本書また多少の利便無きにあらざるべし。

編 者 識

新註白隱法語集目次

夜船閑話	一
贈 ^{スル} 遠方之病僧 ^{シヨ} 書 ^ノ 一 ^ノ 節 ^ヲ (遠羅天笠)	四〇
見性成佛丸方書	六
假名法語	七
辻談議	九
主心 ^{シム} お婆粉 ^{ハコ} 引歌 ^{ヒキウタ}	二五
坐禪和讚	三七

安心ほこりたゝき……………一三〇

寶鏡窟記……………一四〇

施行歌……………一五七

寢惚之眼覺……………一六四

おたふく女郎粉引歌……………一七六

大道ちよぼくれ……………一九六

○夜船閑話。寶永七年、師二十六歳參學に勞して病を得、即ち神經衰弱に罹れり、偶々書中記するが如く山城國白河の山中に白幽真人の在るを聞き、直ちに之を訪ふて内觀修養の訣を受け、これを實行して爾來精神爽快にして身心の健康を得たり、本書は其の實行の方法を説きたるもの

新註白隱法語集

夜船閑話

夜船閑話序

寶曆丁丑の春、長安の書肆松月堂何某とかや聞えし、遠く書を裁して吾が鶴林近侍の左右に寄せて云はく、伏し承はる、老師の古紙堆中、夜船閑話とか云へる草稿あり。書中多く氣を鍊り精を養ひ、人の營衛をして充たしめ、専ら長生久視の秘訣を聚む。謂はゆる神仙鍊丹の至

寶曆七年、師七十
三歳の時上梓して
爾來普く世に行は
る。閑話とはムダ
バナシの意にてカ
ンナと讀む。

○長生久視。老子
第七章に出づ、久
視は瞑目の反對
なれば、長生して
久しく死せず瞑目
せざるを長生久
視といふ。長生不
死といふに同ト。

要なりと。是の故に世の好事の君子、是れを思ふ事、荒
早の雲霓の如し。偶々雲水の徒侶、竊かに傳寫し來るの
るも、秘重し珍藏して人をして見せしめず、天瓢ひなし
く櫃にをさめて匿したるが如し。願はくば是れを梓に壽
ながふして、以て其の濁を慰せん。聞く老師常に人を利
するを以て老後を樂しみたまふと、若し夫れ人に利あら
は、師豈に是れを吝しみたまはんやと。二虎含み來つて
師に呈す、師微々として笑ふ。此において諸子、舊書櫃
を開けば、草稿蠶魚の腹中に葬らるゝ者半に過たり。諸
子即ち訂正傳寫して既に五十來紙を見る、即ち封裏して

○布衲子。布衲は
木綿の衣をいふ布
衲子は木綿の衣を
着たる者、即ち雲
水の僧侶を指す。

○叢林の頭角。禪
僧の集合して道を
學する所を叢林と
云ふ、頭角とはカ
シラ分など、云は
んが如し。

以て京師に寄せんとす、予が馬齒一日の諸子に長たるを
以て、其の端由を書せん事を責む。予も亦辭せずして書
す、云はく、師鵝林に住する事大凡四十年鉢囊を掛けし
より以來、雲水參玄の布衲子、纔かに門閭に跨れば師の毒
涎を甘ない、痛棒を滋しとして辭し去ることを忘るゝ者
或は十年、或は二十年、鵝林々下の塵と成る事も亦た總
に顧みざる底あり。盡く是れ叢林の頭角、四方の精英な
り。各々西東五六里が間に分かれて、舊舎、廢宅、老院
破廟、借て以て菴居の處として清苦す。朝艱暮辛、晝暎
夜凍、口に投ずる者は菜葉麥藁、耳に觸るゝ者は熱喝垢

○采玉何晏。采玉とは唐の莊宗の時刑部侍郎太常卿たりし清河の人崔居儉を云へるものならんか。何晏は魏の文帝武帝に仕へて侍中商書たり、夏侯玄等と競ふて清談を爲せし人、共に風骨清秀なりしと傳へらる。

○風子。風原。

○内觀。内省法といふに同じ。

罵、骨に徹する者は眞拳痛棒、見る者類を攢め、聞く者肌には汗す、鬼神も亦た涙を浮べつべく、魔外も亦た掌を合せつべし。其の初め來る時は、采玉、何晏が美貌有りて肌膚光澤凝れる膏の如くなる者も、久しからずして恰かも杜甫、賈島が形容枯槁、顔色憔悴するが如く、或は屈子に澤畔に逢ふが如し。參玄軀命を顧みざる底の勇猛の上士にあらざるよりは、何の樂有つてか片時も湊泊する事を得んや。是の故に往々に參窮度に過ぎ、清苦節を失する族は、肺金いたみかじけ、水分枯渴して、疝癰塊痛、難治の重症を發せんとす。是れを憐れみ是れ

○華陀扁倉。華陀は漢代の人、魏の曹操を癒して名あり、扁倉は扁鵲ならん、共に名醫として世に稱せらる

を愁ひて、師不豫の色有る者連日、乍ち忍俊不禁にして雲頭を按下し、老婆の乳臭を絞つて是れに授くるに内觀の秘訣を以てす。乃ち云はく、若し是れ參禪辨道の上士心火逆上し、身心勞疲し、五内調和せざる事あらんに、鍼灸藥の三つを以て是れを治せんと欲せば、縦ひ華陀扁倉といへども輒く救ひ得む事能はじ、我に仙人還丹の秘訣あり、爾が輩試に是れを修せよ、奇功を見る事、雲霧を披いて皎日を見るが如けん。此の秘要を修せんと欲せば、且らく工夫を抛下し、話頭を粘放して先つ須らく熟睡一覺すべし。其の未だ睡りにつかず、眼を合せざる

○膺輪。へそをいふ。

○氣海丹田。膺下一寸半の處を氣海といひ、二寸の處を丹田といふ。

○本來の面目。禪家第六祖慧能の創語にして、たゞ其のまゝに、口に説く能はざる心の本性をいふ。

○唯心の淨土已心の彌陀。萬有悉く吾一心の立脚地より、極樂淨土も彌

以前に向て、長く兩脚を展べ、強く踏みそろへ、一身の元氣をして膺輪氣海丹田腰脚足心間に充たしめ、時々此の觀を成すべし。我此の氣海、丹田、腰脚、足心、總に是れ我が本來の面目、面目なのに鼻孔がある。我此の氣海丹田、總に是れ我が自分の家郷、家郷何の消息がある。我が此の氣海丹田、總に此れ我が唯心の淨土、淨土何の莊嚴がある。我が此の氣海丹田、總に是れ我が己心の彌陀、彌陀何の法をか説くと打返へしく、常に斯くの如く妄想すべし。妄想の功果つもらば、一身の元氣いつしか腰脚足心間に充足して、膺下豁然たる事、い

陀も吾一身に存在すといふ。

○豁然。飄の如くに張るをいふ。

○此の秘要を修せんと欲せば……老僧が頭を切り將去れ。内觀内省の方法を略述せり。曰く、此の方法を實行せんとせば、睡眠の前仰臥して先づ長く吾兩脚を伸し、強く踏み揃へて一身の元氣活力を下腹部に充満せ

まだ篠打ちせざる鞠の如けん。恁麼に單々に妄想し將去て、五日七日乃至三七日を経たらむに、從前の五積六聚氣虛勞役等の諸症底を拂て平癒せずんば、老僧が頭を切り將去れ。此に於て諸子歡喜作禮して密々に精修す各々悉く不思議の奇功を見る。功の遲速は進修の精麤に依るといへども、大半皆全快す。各々内觀の奇功を讚嘆して休まず。師の曰く、爾が輩、心病全快を得て以て足れりとする事勿れ、轉た治せば轉た參せよ、轉た悟らば轉た進め、老僧初め參學の時、難治の重病を發して其の憂苦諸子に十倍せり。進退惟れ谷まる。尋常心ひそ

しむる様に爲し、吾が此の下腹部、兩脚等は總べて吾心の本性なり其の本性の姿は如何、わが此の精神の宿る下腹部は吾身の根元なり、其の根元の生れ故郷は果して何の心作用を語るぞ、此精神の在る所、即ち是れ淨土なり、彌陀の説法する所なり、吾此の淨土の有様や如何、吾精神中

かに思惟すらく、生きて此の憂愁に沈まんよりは、如かじ早く死して此の革囊を捨てんにはと、何の幸ぞや、此の内觀の秘訣をつたへて全快を得ること今の諸子のごとし、至人の云はく、此は是れ神仙長生不死の神術なり、中下は世壽の百歳なるべし、其餘は計り定むべからず予則ち歡喜に堪へず、精修怠らざる者大凡三年、心身次第に健康に、氣力次第に勇壯なる事を覺ゆ、此處に於て重ねて心に竊かに謂へらく、縦ひ此の眞修を修し得て、彭祖が八百の歳時を保ち得るも、唯だ是れ一箇頑空無智の守屍鬼ならくのみ。老狸の舊窠に睡るが如し。終には

の彌陀は何を説くぞと、斯様に繰返して内省し居らば一身の元氣は下腹部に充滿せん、斯して次第に其の空想を止めて一日二日乃至三週間も経過せば從來の鬱氣病患は底を拂つて平癒すべきを説けり。

○葛洪鐵拐等、何れも仙士道士にして長生不死の法を求めたる士。

壞滅に歸せん。何が故ぞ、今既に獨りも葛洪、鐵拐、張華、費張が輩を見ず、如かじ四弘の大誓を憤起し、菩薩の威儀を學び、常に大法施を行じ、虚空に先つて死せず、虚空に後れて生ぜざる底の不退堅固の眞法身を打得し、金剛不壞の大仙身を成就せんにはと。此に於て眞正參玄の上士兩三輩を得て内觀と參禪と共に合せ并べ貯へて、且つ耕し且つ戦ふ事、蓋し茲に三十年、年々一員を添へ、二肩を増し得て今既に二百衆に近し。其の中間方來の禰子、勞屈疲倦の族、或は心火逆上し、正に發狂せんとする底を憐れみ、密かに此の内觀の至要を傳授し、立所

○眞法身。宇宙の
本體と一致したる
境界。

○大仙身。佛を大
仙といふ、こゝに
は不生不滅の佛身
といふことなり、

○變難を忘る。兩
眼明らかなるをい
ふ。

○三百五百の海茶
の聚會し云云。三
百人五百人と多數
の人々を集めとい
ふこと。

○雲水。禪家の僧

に快癒せしめ、轉た悟れば轉た進ましむ。馬年今歳古稀
に越えたりと云へども、半點の病患なく、齒牙全く揺落
せず、眼耳次第に分明にして動もすれば變難を忘る。毎
月兩度の法施終に怠倦せず、請に他方に應じて三百五百
の海衆を聚會して、或は五旬七旬を經に録に雲水の所望
に隨ふて胡說亂道するは、大凡五六十會に及ぶといへど
も、終に一日も罷講、齋を鎖さず、身心健康氣力次第に
二三十歳の時には遙かに勝されり。是れ皆彼の内觀の奇
功に依る事を覺ゆ。住菴の諸子、各々悲泣作禮して云は
く、吾が師大慈大悲、願はくば内觀の大略を書せよ、書

偈。

○稿中何の説く所
ぞ云云。本書は如
何なる事を説きし
やといふに、健康
長壽を得んには先
づ肉體を鍛練せざ
るべからず、肉體
を鍛練するに最も
宜しき方法は吾が
精神氣力を下腹部
の氣海丹田に集注
すべし、斯くすれ
ば一身の活力こゝ
に集注す活力こゝ
に集注すれば身體

し留めて後來禪病疲倦吾が輩の如き者を救へ、師即ち領
す、立處に草稿成る。稿中何の説く處ぞ、曰く、大凡生
を養ひ長壽を保つの要、形を鍊るにしかず、形を鍊るの
要、神氣をして丹田氣海の間に凝らさしむるにあり、神
凝るときは氣聚る、氣聚する時は即ち眞丹成る、丹成る
時は形固し、形固るときは神全し、神全るときは壽し、
是れ仙人九轉還丹の秘訣に契へり、須らく知るべし、丹
は果して外物に非ざること、千萬唯心火を降下し、氣
海丹田の間に充たしむるに在るらくのみ。住菴の諸子此
の必要を勤めてはげみ、進んで怠らずんば禪病治し勞疲

を救ふのみにあらず、禪門向上の事に到て年來疑團あら
 む人は、大に手を拍して大笑する底の大歡喜有らむ、何
 が故ぞ、月高くして城影盡く。

維時寶曆丁丑孟正二十五嘗。

窮乏菴主飢凍炷香稽首題

の各機關活動して
 肉體健全なるべ
 く、肉體健全なる
 時は精神も亦た健
 全なりてふ事を脱
 けるものなり。丹
 とは神仙の鍊るこ
 いふ長生不死の神
 藥。

○月高くして城影
 盡く。月高城影盡。
 霜重柳條疎。三體
 詩二十四丁秋涼。

○山野 拙者或は
 小生など、いふが
 如く、山僧野僧と
 自己を卑下してい
 ふ語。

○參學の日云云。
 師の修養時代、十
 五歳出家よりおよ
 そ二十二三歳頃の
 刻苦をいふ。

○古人二三十年云
 云。一夜忽然とし
 て宛かも竹の節を
 落したやうな心持
 に悟りたれば、古
 人が二十年或は三

山野初の參學の日、誓つて勇猛の修心を憤發し不退の
 道情を激發し、精鍊刻苦する事、既に兩三霜、乍ち一夜
 忽然として落節す、従前多少の疑惑根に和して氷融し、
 曠劫生死の業報、底に徹して漚滅す。自ら謂へらく、道
 人を去る事定に遠からず、古人二三十年是れ何の捏怪ぞ
 と、怡悅蹈舞を忘るゝこと數月、向後日用を廻顧するに、
 動靜の二境全く調和せず、去就の兩邊總に脱洒ならず。
 自ら謂へらく、猛く精彩を着け、重ねて一回捨命し去ら
 んど、こゝにおひて牙關を咬定し、雙眼睛を瞪開し、寢
 食ともに廢せんぞとす、既にして未だ期月に亘らざるに、

十年刻苦せりさい
 ぶが如きは何たる
 捏造奇怪ぞと思へ
 り。
 ○去就。こゝろ去
 り彼處に就く。即
 ち動作云はんが
 如し。

心火逆上し、肺金焦枯して雙脚氷雪の底に浸すが如く
 兩耳溪聲の間を行くが如し、肝膽常に怯弱にして舉措恐
 怖多く、心神困倦し、寐寤種々の境界を見る、兩腋常に
 汗を生じ、兩眼常に涙を帶ぶ、こゝにおいて遍く明師に
 投じ、廣く名醫を探るといへども百藥寸功なし、或る人
 曰く、城の白河の山裏に巖居せる者あり、世人是を名け
 て白幽先生といふ、靈壽三四甲子を闕みし、人居三四里
 程を隔つ、人を見る事を好まず、行く則は必ず走りて避
 く、人其の賢愚を辨ずることなし。里人専ら稱して仙人
 とす、聞く故の丈山氏の師範にして精しく天文に通じ、

○寛永第七。師時
 に年二十六。
 ○行纏。脚絆のこ
 となり。
 ○濃東。美濃の大
 垣在を發せしを云
 ○黒谷。京都の東
 部、眞如堂の在る
 所、これより東北
 の方約一里にして
 白河に達す。
 ○白川。比叡山の
 登り口なり。

深く醫道に達す、人あり、禮を盡して答叩する則は稀れ
 に微言を吐く、退いて是れを考ふるに大に人に利ありと、
 こゝにをいて寶永第七庚寅孟正中浣竊かに行纏を着け
 濃東を發し黒谷を越ゆ、直ちに白川の邑に到り、包を茶
 店におろして幽が巖栖の處を尋ぬ。里人遙かに一枝の溪
 水を指す。即ち彼の水聲に隨ふて遙かに山溪に入る。正
 に行く事里ばかりにて乍ち流水を踏斷す。樵徑もまたな
 し、時に一老夫あり、遙かに雲煙の間を指す、黃白にし
 て方寸餘なる者あり、山氣に隨ふて或は顯はれ或は隠る、
 是れ幽が洞口に垂下する所の簾簾なりと。予即ち裳を褰

○納衣。法衣のこと。

○鞠躬。身體を少しく屈めたる貌。

○金剛、般若。金剛經、般若心經ならん。

げて上る。巉巖を踏み蒙耳を披けば、氷雪草鞋を咬み、雲露納衣を壓す、辛汗を滴し、苦膏を流して漸く彼の蘆簾の處に到れば、風致清絶、實に物表に丁々たる事を覺ゆ心魂震ひ恐れ、肌膚戰慄す、且らく巖根に倚て數息すると數百、少焉あつて衣を振ひ襟を正して畏るゝ鞠躬して簾子の中を望めば朦朧として幽が目を收めて端坐するを見る。蒼髮垂れて膝に到り、朱顔麗しうして棗の如し。大布の袍を掛け、輭草の席に坐せり、窟中總かに方五六笏にして全く資生の具無し、机上只中庸と老子と金剛、般若とを置く。予則ち禮を盡くして苦ろに病因を告

- 咨叩。問ひ質すこと。
- 五内。肺、肝等の五臓をいふ。
- 九候。兩眼、鼻孔、口等をいふ。
- 觀理。觀法をいふ。
- 扁倉華陀。前に出づ。

げ且つ救ひを請ふ。少焉ありて幽、眼を開いて熟視し、徐々として告げて曰く、我は是れ山中半死の陳人、樵栗を拾ひて食ひ、麋鹿に伴つて睡る。此の外更に何をか知らんや。自ら愧づ遠く上人の來望を勞する事を。予即ち轉た咨叩して休まず。時に幽、恬如として手が手を捉らへて精しく五内を窺ひ九候を察す。爪甲長さこと半寸、慘乎として頰を擗めてつげていはく、已哉、觀理度に過ぎ進修節を失して終に此の重症を發す、實に醫治し難き者は公の禪病なり、若し鍼灸藥の三つの物を恃んで而して後に是を救はんと欲せば、扁倉力を盡し、華陀氣を擗む

○是れ彼の起倒は必ず地に依るの謂なり。大莊嚴論經卷一に曰く「人地に依て倒るゝ者は又地に依て起つ」さ、本文はこの例を引けるものならん。

○久視。前に出づ

○天れ大道分れて兩儀あり。大道とは太極をいふ。兩儀は陰陽なり。以

るも奇功を見る事能はじ、只今既に觀理の爲めに破らる、勤めて内觀の功を積まずんば終に起つこと能はじ、是れ彼の起倒は必ず地に依るの謂なり、予曰く、願はくは内觀の要秘を聞かむ、學びがてらに是れを修せん、幽肅々如として容をあらため、從容として告げて曰く、嗚呼、公の如きは問ふことを好むの士なり、我が昔し聞ける處を以て微しく公に告んか、是れ養生の秘訣にして人の知る事稀なり、怠らずんば必ず奇功を見ん、久視も亦期しつべし。夫れ大道分れて兩儀あり、陰陽交和して人物生る。先天の元氣中間に黙運して五臟列り經脈行はる、

下古來の漢方の醫學に依り人體の機關を説けり。

○肺金。肝木。心火。腎水。肺・肝・脾等を陰陽五行に配していふ。古來の漢方にて云ふ所の如し。

衛氣營血、互に升降循環する者、晝夜に大凡五十度、肺金は牝藏にして膈上に浮び、肝木は牡藏にして膈下に沈む、心火は太陽にして上部に位し、腎水は大陰にして下部を占む、五臟に七神あり、脾腎各々二神を藏くす、呼は心肺より出で、吸は腎肝に入る、一呼に脈の行く事三寸、一吸に脈の行く事三寸、晝夜に一萬三千五百の氣息あり脈一身を巡行する事五十次、火は輕浮にして、つねに騰昇を好み、水は沈重にして常に下流を務む。若し人察せず、觀照或は節を失し、志念或は度に過ぐるときは、心火熾衝して肺金焦薄す、金母苦しむときは水子衰滅す、

○四大。地水火風の四大種といふこと、佛教にては一切の物質は此の四の成分に依りて構成せらるゝと爲るなり。例へば地大はすべて堅き性質をいふが故に人の身體の骨肉は之れに屬す、水は濕性を總稱するが故に血は水大なりといふが如く、人の身體も亦た此の四大質に依りて構成せらるゝ爲す。

○才斗。史記に、「才斗を撃つて自衛す」とあり、才斗は戦時に使用するドラのことなり。○人身も亦た然り云云。前に下民を愛しむ時は國平和なりといふ例を引きて人の身體も亦た一國の如し、心氣を常に下に充たしめ頭寒足熱なら

夜船閑話

母子互に疲傷して各々五位困倦して六屬凌奪す、四大増損して各々百一の病を生ず、百藥功を立つる事能はず、象醫總に手を束ねて終に告る處なきに至る、蓋し生を養ふ事は國を守るが如し、明君聖主は常に心を下に專にし、暗君庸主は常に心を上に恣にする、上に恣にするときは、九卿權に誇り、百僚寵を恃んで會て民間の窮困を顧る事無し、野に菜色多く、國に餓莩多し、賢良潛み竄れ、臣民瞋り恨む、諸侯離叛、衆夷競ひ起りて終に民庶を塗炭にし、國脈永く斷絶するに到る、心を下に專にするときは、九卿儉を守り、百僚約を勤めて常に民間の勞役

を忘るゝ事なし、農に餘の粟あり、婦に餘の布有りて群賢來り屬し、諸侯恐れ服して民肥而國強く、令に違するの烝民なく、境を侵すの敵國なし、國刁斗の聲を聞く事なく、民戈戟の名を知らず。人身も亦た然り、至人は常に心氣をして下に充たしむ、心氣下に充つるときは、七凶内に動く事なく、四邪また外より窺ふ事能はず、營衛充ち心神健なり、口終に藥餌の甘酸を知らず、身終に鍼灸の痛痒を受けず。庸流はつねに心氣をして上に恣にする、上に恣にするときは三寸の火、石寸の金を尅して五官縮り疲れ、六親苦しみ恨む、是の故に漆園曰く、眞

しめば身體安靜健
康なりと説く。

○六爻。易の卦を
なす六つの畫段を
いふ。

○地雷復。地天泰。
山地剝。皆易の卦
の名なり。

夜船閑話

二三

人の息は是れを息するに踵を以てし、衆人の息は是れを
息するに喉を以てす。許俊が曰く、蓋し氣下焦に在ると
きは其の息遠く、氣上焦に有るときは其の息促まる、上
陽子が曰く、人に眞一の氣有り、丹田の中に降下すると
きは一陽また復す、若し人始陽初復の候を知らむと欲せ
ば、暖氣を以て是れが信とすべし。大凡生を養ふの道、
上部は常に清涼ならん事を要し、下部は常に温暖ならん
事を要せよ、夫れ經脈の十二は支の十二に配し、月の十
二に應じ、時の十二に合す。六爻變化再周して一歳を全
ふするが如し。五陰上に居し、一陽下を占む、是れを地

地雷復と云ふ、冬至の候なり、眞人の息は是れを息するに
踵を以てするの謂か、三陽下に位し、三陰上に居す、是
れを地天泰と云ふ、孟正の候なり、萬物發生の氣を含ん
で、百卉春化の澤を受く、至人元氣をして下に充たしむ
るの象、人は是れを得るときは營衛充實し、氣力勇壯なり、
五陰下に居し、一陽上に止まる、是れを山地剝といふ。
九月の候なり。天是れを得るときは林苑色を失し百卉荒
落す。是れ衆人の息する喉を以てするの象。人は是れを得
るときは形容枯槁し齒牙搖落す、所以に延壽書に云はく、
六陽共に盡く、則ち是れ全陰の人、死し易し、須らく知

○鍊丹の術。神仙の鍊りたる長生不死の神薬を製する方法。

○五無漏。漏は煩惱のこと、無漏とは煩惱無き悟をいふ。

○六欲。色、形貌等、すべて人欲をいふ。釋禪波罪蠻次第法門に出づ。

○守一にして去り是れを養ふて無適云云。程明道の所謂守一無適を引け

るべし、元氣をして常く下に充たしむ、是れ生を養ふ樞要なる事を。昔、吳契、初めて石臺先生に見ゆ、齋戒して鍊丹の術を問ふ、先生の曰く、我に元立真丹の神秘あり、上々の器にあらざるよりんば得て傳ふべからず古、黄成子は是れを以て黄帝に傳ふ、帝三七齋戒して是れを受く、夫れ大道の外に真丹無く、真丹の外に大道無し、蓋し五無漏の法あり、偏の六欲を去り、五官各々其の職を忘るゝときは、混然たる本源の眞氣、彷彿として目前に充つ、是れ彼の大白道人の所謂我天を以て事ふる所の天に合せる者なり、孟軻氏の謂はゆる浩然の氣、是れをひ

り。守一無適とは、心な一事に専注して餘事に適く無からしむるをいふ、二程全書中の粹言論道篇、及び入關語録に詳かなり。朱子曰「主一とは只是れ心專一、他念を以て之れに離へざるをいふ、無適只是れ走作せず讀書の時の如き、只書を讀み、衣を着くる時は只衣を着け、此の一件を

さゝりて臍輪氣海丹田の間に藏めて歲月を重ねて是れを守て守一にし去り、是れを養ふて無適にし去て、一朝乍ち丹竈を掀翻するときは、内外中間八紘四維、總に是れ一牧の大還丹、此の時に當りて初めて自己即ち是れ天地に先だつて生ぜず、虚空に後れて死せざる底の眞箇長生久視の大神仙なる事を覺得せん、是れを眞正丹竈功成る底の時節とす、豈に風に御し霞に跨り、地を縮め水を踏む等の銷末たる幻事を以て懐とする者ならんや、大洋を攪いて酥酪とし、厚土を變じて黄金とす、前賢曰く、丹は丹田なり、液は肺液なり、肺液を以て丹田に還へす、是

了し、又一件を做し、身這裏に在り、心も亦這裏に在り」と。
 ○掀颯。掀はハネハダるをいふ。掀颯は手の裡に穂をコロコロと返すが如く自由自在にするをいふ。
 ○李家。李子才、宋の人、字は挺之、程修を師として易を受け、其秦漢以來知る者鮮き圖書象數變通の妙を得たり。

の故に金液還丹といふ、予が曰く、謹んで命を聞きつ且らく禪觀を抛下し、努め力めて治するを以て期とせん、恐るゝ處は李士才が謂はゆる清降に偏なる者にあらずや心を一處に制せば、氣血或は滯碍する事なからむか、幽微々として笑つて云はく、然らず、李子いはすや、火の性は炎上なり、宜しく是れを下らしむべし、水の性は下れるに就く、宜しくこれをして上らしむべし、水上り火下る、是れを名けて交と云ふ、交るときは既濟とす、交らざるときは未濟とす、交は生の象、不交は死の象なり、李家が謂はゆる清降に偏なりとは丹溪を學ぶ者の弊を救

たり。
 ○既濟。易の卦の名、易に水在二火上、既濟、君子以思患而豫二防之とあり。
 ○腎。五臓の一、形長く扁くして胃の下、兩旁に在り尿水を分泌する機關。「素問」に、腎は強を作すの官とあり。

はんととなり、古人云はく、相火上り易きは身中の苦しむ所、水を補ふは火を制する所以なり、蓋し火に君相の二義あり、君火は上に居して静を主り、相火は下に處して動をつかさどる、君火は是れ一心の主なり、相火は宰輔たり、蓋し相火に兩般あり、謂はゆる腎と肝となり、肝は雷に比し、腎は龍に比す、是の故に云ふ、龍をして海底に歸せしめば必ず迅發の雷なけん、但し雷をして澤中に藏れしめば必ず飛騰の龍なけん、海か澤か、水にあらすといふ事なし。是れ相火上り易きを制するの語にあらずや、又曰く心勞煩するときは虚して心熱す、心虚する

○形模。形状模様なり。
 ○打發。悟を打ち開く。

○計較思想。死や角と思ひ煩ふ心。

とさは是れを補するに心を下して以て腎に交ゆ、是れを補と云ふ、既濟の道なり、公先きに心火逆上して此の重病を發す、若し心を降下せずんば、縦ひ三界の秘密を行じ盡したりとも起つ事得じ、且つ又我が形模、道家者流に類するを以て、大に釋に異なる者とするか、是れ禪なり、他日打發せば大に笑ひつべきの事有らむ、夫れ觀は無觀を以て正觀とす、多觀の者は邪觀とす、向に公多觀を以て此重症を見る、今是れを救ふに無觀を以てす、また可ならずや、公若し心炎意火を收めて丹田及び足心の間に置かば、胸膈自然に清涼にして一點の計較思想な

○眞觀清淨觀。法華經普門品に出づ眞正の觀。
 ○放下。捨て置くこと。
 ○阿舍。阿舍經のこと。
 ○摩訶止觀。天台宗智者大師の著述十卷あり、天台宗の觀法の法を説けるものなり。

く、一滴の識浪情波なけん、是れ眞觀清淨觀なり、云ふ事なかれ、しばらく禪觀を放下せんと、佛の言はく、心を足心にをさめて能く百一の病を治すと、阿舍に酥を用ゆるの法あり、心の勞疲を救ふ事尤妙なり、天台の摩訶止觀に病因を論ずる事甚だ盡せり、治法を説く事も亦た甚だ精密なり、十二種の息あり、よく衆病を治す、臍輪を縁じて豆子を見るの法あり、其の大意、心火を降下して丹田及び足心に收むるを以て至要とす、但だ病を治するのみにあらず、大に禪觀を助く、蓋し繫縁諦眞の二止あり、諦眞は實想の圓觀、繫縁は心氣を臍輪氣海丹

○永平の開祖師。
道元禪師。

○顛師。智者大師
名。知顛といふ。

○日雲和尚。東福
寺の佛照國師。或
は建長寺の佛頂禪
師ならんか。
○腔子。腔はかこ
ひなり。また團の
中の空虚なるをい
ふ。

田の間に收め守るを以て第一とす、行者是れを用ゆるに
大に利あり、古、永平の開祖師、大宋に入て如浄を天童
に拜す師、一日密室に入て益を請ふ、浄曰く、元子、座
禪の時、心を左の掌の上に置くべしと、是れ即ち顛師
の謂はゆる繫縁の大略なり、顛師初め此の繫縁内觀の秘
訣を教へて其家兄鎮愼が重痾を萬死の中に助け救ひたま
ふことは精しく小止觀の中に説けり、また白雲和尚曰く、
我つねに心をして腔子の中に充たしむ、徒を匡し衆を領
し、賓を接し機に應じ、及び小參普説七縱八横の間に於
て是れを用ひて盡る事なし、老來殊に利益多き事を覺ふ

○彭祖。上古七百
歳を保ちしといふ
仙人。
○偃臥。臥すこと。

と、寔に貴ぶべし、是れ蓋し素問にみゆる恬澹虚無なれ
ば、眞氣是れにしたがふ、精神内に守らば病何れより來ら
むといふ語に本づきたまふものならむか、且つ夫れ、内
に守るの要、元氣をして一身の中に充塞せしめ、三百六
十の骨節、八萬四千の毛竅、一毫髪ばかりも欠缺の處な
からしめん事を要す、是れ生を養ふ至要なる事を知るべ
し、彭祖が曰く、和神導氣の法、當さに深く密室を鎖ざ
し、牀を安んじ、席を煖め、枕の高さ二寸半、正身偃臥
し、瞑目して心氣を胸膈の間に閉ざし、鴻毛を以て鼻上
につけて、動かざること三百息を経て、耳聞く處なく、

○出入の息云云。
これは氣息觀のこ
とを説けり。

目見る處なく、斯の如くなるときは、寒暑も侵す事能はず、蜂蠶も毒する事能はず、壽三百六十歳、是れ眞人に近しと、又蘇内翰が曰く、已に飢て方に食し、未だ飽かずして先づ止む、散步逍遙して務めて腹を空からしめ、腹の空なる時に當て即ち靜室に入り、端坐默然して出入の息を數へよ、一息より數へて十に到り、十より算へて百に至り、百より數へ放ち去つて千に至りて此の身兀然として、此の心寂然たる事虚空と等し、斯のごとくなる事久ふして一息おのづから止まる、出でず入らざる時、此の息八萬四千の毛竅の中より雲蒸し霧起るが如く、無

○無始却來。こゝ
にては久しき以前
よりとの義なり。

○酥を用ゆるの法
云云。前に阿舎に
説けりと語れる法
なり。
○四大。前に出づ
○輕蘇。蘇は酥の
誤りなるべし。酥
は牛羊の乳を以て

始劫來の諸病自ら除き、諸障自然に除滅する事を明悟せん。譬へば盲人の忽然として眼を開くが如けん。此の時人に尋ねて路頭を指す事を用ひず、只要す尋常言語を省略して爾の元氣を長養せん事を、此の故に云ふ、目を養ふ者は常に瞑し、耳根を養ふ者は常に飽き、心氣を養ふ者は常に黙すと、予が曰く、酥を用ゆるの法、得て聞いたべしや。幽が曰く、行者定中四大調和せず、身心共に勞疲する事を覺せば、心を起して應さに此の想を成すべし。譬へば色香清淨の輕蘇、鴨卵の大きさの如くなる者、頂上に頓在せんに、其の氣味微妙にして遍く頭

作りたる漿にして
元より柔軟なる物
なり。

○鼻根身根。佛教

にては五官の事を
五根といふ。故に
鼻根とは鼻の官
能をいひ。身根は
觸覺の官能をいふ
○走。叟と云ふに
同じ。自己を卑下
していふ。
○卅歳。少年時代
をいふ。

夜船閑話

三四

髓の間をうるはし、浸々として潤下し來て兩肩及び雙臂、
兩乳、胸膈の間、肺肝腸胃、脊梁腎骨、次第に沾注し將
ち去る、此の時に當て胸中の五積六聚、疝癰愧痛、心に
随つて降下すること水の下につくがごとく、歴々として
聲あり、遍身を周流し、雙脚を温潤し、足心に至て即ち
止む、行者再び應さに此の觀を成すべし、彼の浸々と
して潤下する所の餘流、積もり湛れて、暖め蒸す事恰か
も世の良醫の種々妙香の藥物を集め、是れを煎湯して浴
盤の中に盛り湛れて、我が臍輪已下を漬け蒸すがごとし。
此の觀をなすとき、唯だ所現のゆるるに鼻根乍ら希有の香

氣を聞き、身根俄に妙好の軟觸を受く。身心調適なる事
二三十歳の時には遙かに勝れり、此の時に當て積聚を消
融し、腸胃を調和し、覺ゆる肌膚光澤を生ず。若しそれ
勤めて怠らすんば、何れの病か治せざらむ、何れの徳か
積まざらん、何れの仙か成せざる、何れの道か成せざる
其の功驗の遲速は、行人の進修の精麤に依るらくのみ、
走始め卅歳の時、多病にして公の患に十倍しき、衆醫總
に顧みざるに到る、百端を窮むと雖も救ふべきの術なし
此に於て上下の神祇に祈りて天仙の冥助を請ひ願ふ、何
の幸ぞや計らずも此の軟酥の妙術を傳受する事を、歡喜

○端由。事故といふに同じ
 ○黄梁半熟の一夢云云。彼の盧生の故事なり。近く諺曲邯鄲に有名なり

に堪はず、綿々として精修す、未だ期月ならざるに、衆病大半消除す、爾來輕安なる事を覺ゆるのみ。癡々兀々月の大小を記せず、年の閏餘を知らず、世念次第に輕微にして人欲の舊習もいつしか忘れたるが如し、馬年今歲何十歳なる事もまた知らず、中頃端由有りて若丹の山中に遭逢する者大凡三十歳、世人都て知る事なし、其の中間を顧るに、恰かも黄梁半熟の一夢の如し、今此の山中無人の所に向て此枯槁の一臭骨を放て太布の單衣纒に二三片を掛け、嚴冬の寒威綿を折くの夜といへども、枯腸を凍損するに至らず、山粒すでに断えて穀氣を受けざる

○凍餒。こゝろ、うゆること、孟子に、文王之民、無凍餒之老者とあり

○履聲。草履の音

事、動もすれば數月に及ぶといへども、終に凍餒の覺も無き事は、皆此の觀の力ならずや、我今既に公に告ぐるに一生用ひ盡くさる底の秘訣を以てす、此の外更に何をか云はんやと言つて目を收めて黙坐す。予も亦涙を含んで禮辭す、徐々として洞口を下れば、木末纒に殘陽を掛く、時に履聲の丁々として山谷に答ふるあり、且つ驚き且つ怪んで畏づく回顧すれば、遙かに幽が巖窟を離れて自ら送り來るを見る、即ち曰く、人迹不到の山路西東分ち難し、恐らくは歸客を惱せん、老父しばらく歸程を導かんと云つて大駒履を着け、瘦鳩杖をひき、巖窟を

○慘然。イタム貌

踏み嶮岨を陟る事、飄々として坦途を行くが如く、談笑して先驅す。山路遙かに里許を下りて彼の溪水の所に到つて即ち曰く、此の流水に随ひ下らば、必ず白川の邑に到らむと云つて慘然として別る、且らく柴立して幽が回歩を目送するに、其の老歩の勇壯なる事、飄然として世を遁れて羽化して登仙する人の如し、且つ羨み且つ敬す自ら恨む、世を終るまで此等の人に随逐する事能はざる事を。徐々として歸り來て時々には彼の内觀を潜修するに纔かに三年と充たざるに從前の衆病、藥餌を用ひず鍼灸を假らず、任運に除遣す、特り病を治するのみにあらず

○鵠林。師の號なり。

從前 脚を挟む事、齒牙を下す事得ざる底の難信、難透、難解、難入底の一着子、根に透り底に徹して透得して大觀喜を得る者、大凡六七回、其餘の小悟怡悦、踏舞を忘るゝ者數を知らず、妙喜の謂はゆる大悟十八度小悟數を知らずと、初めて知る、寔に我を欺かざる事を古へ二三緇の襪を着くと雖も、足心常に氷雪の底に浸すが如くなる者、今既に三冬嚴寒の日と雖も襪せず爐せず馬齒すでに古稀を越えたりと雖も指すべき半點の小病もまた無き事は、彼の神術の餘勳ならんか。云ふ事なかれ鵠林半死の殘喘、多少無義荒唐の妄談を記取して以て他

の上流を誑惑すと、是れつとに靈骨あつて、一槌に既に成する底の俊流の爲に設くるにあらず、癡鈍予が如く、勞病予に類する底、看讀して仔細に觀察せば、必ず少し補ならんか。只恐る別人の手の拍して大笑せん事を。何が故ぞ、馬、枯箕を咬んで午枕に喧し。

○贈遠方之病僧書
遠羅天釜の一節を
こゝに抄出したり

遠羅天釜は答鍋島攝州侯近侍書。答法華宗老尼書と本篇とより成る、外に遠羅天釜續集あり本篇は遠方の病僧を慰問して身心の修養を説かれたるものなり。
○因地下。因は舟を牽く聲、又力を出す時の聲なりこゝには省悟の時

贈ニ遠方之病僧ニ書（遠羅天釜の一節）

便の度毎に貴書並に傳語、者回欽禪人便に又々芳書、殊更野外珍しき水沉一封、親切の至りに候。貴兄事、貴境へ飛錫致され候も、吾等勸め申し侍れば、何とぞ道業怠慢なく、因地下の觀喜をも得られよかしと好便待ち入候處に、夏頃より氣分悪しく、今程延壽堂へ入られ候旨且夕案じ暮し候。者回欽禪人物語には、左程の事にもこれなく、發足の二三日以前に入堂致され候由、如何計り嬉しく存じ候。氣分は如何様の重病沉痾なりとも、それ

覺えず一聲を出す
をいへり。

○延壽堂。病僧の
療養する所を禪門
にては延壽堂とい
ふ。

○逆縁。こゝにて
は逆縁といふに同
じ。

○三十年前去る老
漢。老漢とは正受
老人を指す、此の
物語は師が正受老
人を信州飯山に訪
れし時聞きたるも
のならん。

○名聞。名譽のこ
と。

○感應。感應道交
の略。衆生の感と
佛の應と互に通じ
て融合すること、
佛心よく衆生の心
中に入り、衆生よ
くこれに感じて利
益を受くるをいふ
○三塗。三惡道と
もいふ、地獄、餓
鬼、畜生。
○肺金。夜船閑話
に在り。

は世間に打ち任せて、自分は随分正念工夫肝要と心がけ
これあるべく候。病中苦患の間に仕扱きたる修行は、他
後如何様の逆縁に逢ふても、退惰これなき物の由承はり
及び侍り、大切の時節ぞと思ぼして、努めく油断これ
ある間布候。三十年前去る老漢、病中の僧に對して物語
せられけるは、世に智慧ある人の病中ほど、淺猿しく物
苦しき事はなき事なるぞや、智慧ある儘に來方行末の事
ども際限もなく思ひ續け、看病の人の好悪を咎め、舊識
同伴の間闊を恨み、生前には名聞の遂げざるを愁ひ、死
後には長夜の苦患を恐れ、郷里を思ひては羽翰の生ぜざ

るを憤り、神明に祈りては感應のおそきを嗔り、目を打
ち塞ぎて臥居たるは、殊勝に物静なれども、胸中は九國
の合戦よりも騒しく、心上は三塗の衆生よりも苦し、三
合の病に八石五斗の物思ひなるべし。かく病狂ひ死した
らんには、後の世の有様こそ推し量らるれ。物思ひして
薬にも養生にもなるためしならば、吾々も打寄り手傳ひ
て物思ひ得させんなれども、痛く物思へば、心火逆らひ
上り、肺金痛み費へ、水分枯渴し、寒熱止む事なく、自
盗の二汗は次第に繁くて、果は命根も亦保ち難さに至る
是れ皆平生の志行懶惰にして少し許りの病を妄想心の手

○自盜の二汗。普通の汗されあせをいふ。

○辨道。坐禪辨道さて、佛祖單傳の道を辨へ得んさするをいふ。

贈遠方之病僧書

四四

傳ひて夥しく育て上げたる者なり。然れば病に害せられたるにあらず、妄念に食ひ殺されたるなるべし、寔に妄念は虎狼より恐ろしきものなり、虎狼は戸牖さしたる内へは入る事は叶はぬものなり、妄念の狼は、坐禪靜慮の床の上、七條九條の袈裟の中へも亂れ入る奴なり。或る病人はほろ／＼と打泣きて、吾等程薄福なるものはなきぞとよ、偶に受け難き人身を受け、貴き僧形を得ながら辨道の功をも積まず、佛道の光をも見ずして朽果てんずる事の口惜さよなど泣口説きたるは、殊勝にも愛らしけれども、是れも油断の大不覺者のなれの果なるべし。大

○蒲團上。蒲は海邊に生ずる芦の一種なり、これを以て團圓なる敷具を

贈遠方之病僧書

四五

凡辨道工夫の爲めには、病中程よき事はこれあるべからず、古來賢達の人々の巖谷に身を凭せ、深山に形を隠し給ふ事は、世縁を遠ざけ、塵務を捨離して道行統一に勵み勤めんが爲めなり。然るに病中を除きて別の山谷なく、病中を去て外の深山はあるべからず、病中の人は托鉢作務の勞倦を遁れ、使僧知客の應對も省き、廣衆雜話の喧嘩もなく、僧堂の治亂を知らず、常住の豐儉を見ず死活は天運に投掛け、饑寒は看病の人に打任せて、只狗猫など惱み伏したる體にて何の合點もなく、何の了簡もなく、只一向に蒲團上の事を忘却せず、自己の正念を打

製し、其上に坐して坐禪觀法す、俗に夜具を蒲團といふはこれより轉じたるものなり、されば蒲團上の事とは、坐禪觀法の事を云ふ。

○一念未興以前云云。善惡分別の念未だ曾て起らざる以前を觀よといふ。○塵事。世務に同じ。

失せざるを第一として、生も亦夢幻、死も亦夢幻、天堂地獄、穢土淨刹、悉く抛擲下して一念未興已前、萬機不到の處に向つて、是れ何の道理ぞと、時々點檢して正念工夫相續を肝心とせば、いつしか生死の境を打ち越わ悟迷の際を超出して、金剛不壞の正體を成就せん事、これ眞箇不老不死の神仙ならずや。人界に出生したる思ひ出ならずや、圓贖方袍の威徳ならずや、佛道微妙の靈驗ならずや。眞正參禪の人の前には、吉凶榮辱、逆縁順縁、盡く道業を助くる糧となり、懈怠惰弱の人の前には假初の塵事、芥子ばかりの病氣も、夥しき障りに仕なし

○法眷。寺院の間の親族、法類ともいふ。

て、果は宿業のわざなり、般若に縁こそなければ種々の道理をつけて遠からの般若を遠ざけ、根もなき業障を種えをだて、一生を錯るほどの苦苦しく情なき事はなきぞとよ。古來より重病を受けながら、疑團打破の人々は間多き事なるぞかし。中比さる老和尚の重き腫物を受け給ひて、背後は爛冬瓜の如く腫塞がりて、目もあてられぬ病惱なりけるに、湯藥食事進め參らすより外は、人をも近け給はで、目を打ちふさぎて惱み伏し給ひけるに、ある時、法眷の人々兩三輩見來りて、見問ひ奉りける處へ、外療の人來りて土肉とらんとて、膏藥に藥加へ參

らせられたれば、今夜は常よりも痛ませ給ふ事も侍りぬらん
 かゝる貴き御身に心なき腫物の出来りて、日數多く惱ま
 せたる御いとしさよ、去るにても今日よりは愈肉の上り
 て、目出度快氣ましますさんを待ち奉る計りなるぞやとて
 撫で勞り申しければ、上人は濃く寝入たる人の目打覺め
 たる御顔ばせにて、人々はよくこそ見ね來り給ふもの哉
 包みはつべき事ならねば、物語して聞かせ申すべきぞ、
 誰々も近寄り給ひてよ、扱も此度の病惱は、愚老が爲に
 は貴き善智識なるぞや、腫物の陰にて二十年の非を知り
 四十年の素懷を遂げたる事の嬉しさよ、重病受けざりし

○黒繩。衆合。焦
 熱。叫喚。皆地獄
 の名なり。

己前は、悟に事欠きたる事もなく、修行に不足もなき境
 界なりと思ひて、修行も打ち捨て、臆面もなく供養など
 受け、會釋もなく起居振舞けるが、思はずもかゝる重病
 に沈みて、五體も煎上ぐるが如く、骨節も碎け離る、許
 りなれば、氣遠く心塞りて、黒繩、衆合、焦熱、叫喚の
 苦患を纒に形體に集め上せたる心持にて、悟も見解も何
 地へや行きぬらん、半點の力をも得ずして残るものとして
 は想念と苦痛とのみなりければ、あな口惜し、かく惱み
 苦しみ死したればとて、誰恨むべき事にしも非ず、迎も
 助かるまじき命なるに、是れより正念工夫に取掛りて、

○打成一片。無門
關に曰、自然内外
打成一片と云へ、
悟境に入れる心地
なり。
○生死不二佛魔同
體。生死迷悟を超
越したる境界に到
れば、生も死も一

苦惱や勝つべき、工夫や勝つべき、心の長の及ばん程は
責め戦はんすものをも思ひ定めて、傑烈の大志を憤起し
勇猛にはげみ進みけるに、一度も二度も苦しく絶え入る
心地しけるが打ち返し取り直して間斷もなく進みける程
に、いつしか戦ひ勝て、晝夜のさかひもなく、寐寤の隔
もなく、終には打成一片の工夫現前して、此の十四五
日以來は、想念も苦惱の雲霧などはれ失せたる心持に
て、大安樂なるのみに非ず、真正生死不二、佛魔同體の
眞理に契當し、唯一乗、金剛不壞の奥義に徹底したる
ぞかし、今日より後は如何様の逆縁重障なりとも、菩提

にして二ならず、
或は佛といひ、或
は魔といふ差別な
し。

○唯一乗。金剛
不壞の奥儀。一と
ありて二となき奥
儀。

○驗者。修驗者の
こと。

を妨ぐる事はあらしと覺ゆるで、人々も少し許りの會所
得力あらんを頼み終ひて、茲はの時に至つて、愚老など
が如く興さまし給ひぞ、返すくも健ならん時に、正念
工夫怠り給ふべからず、賢くも煩ひける事よ、箇程目出
度事やあるべき、思へばく此度の腫物は、愚老が爲め
には上もなき善知識ならずや、然らば即ち如何なる供養
をもし、如何なる讚嘆をも述べ度思ふに、次第に愈え行
く事の名殘惜さよとて打笑みたまひけるを、其の時隨侍
申しける僧の物語しけるを聞きたるぞかし、又或る眞言
家の驗者なりと聞け給ふ法師の御房、重き傷寒に惱み給

○叫喚泥犁。叫喚地獄のこと。

ひて、晝夜の分ちもおはさで呻りごめさ給ひけるを、弟子の小法師の小黠氣なるが打ち聴て、あの御房の日頃の氣性にも似給はで、吾等を呵責し給へる時の言葉にも似給はで、あの呻り叫び給ふ事よとて、打ち笑ひければ、上人も打ち笑みて、やをれ小法師よ、三日己前のうめきは、叫喚泥犁の苦痛三日己後のうめきは、最大微妙の法音なるぞ、慢り笑ひて誹謗正法の御罰を蒙るべきぞと云はれければ、小法師かへして、左許り早く、手の裏翻すがごとく如くに成佛はし仕給へるにやと申しければ、さればとよ佛も懈怠の衆生の爲めには涅槃三祇にわたり、勇猛の衆

○大日不二。密教の觀法。

○瑜伽微妙の寶印 瑜伽は梵語ヨーが相應と譯す。あらゆる境が心と相應し、あらゆる行が理に相應し、あらゆる果が諸功德と相應するを瑜伽と

生の爲には成佛一念に在りと説き給へるぞや、去りし頃病苦の堪へ難くて、次第に性體もなく惱み行くまゝに、來生の業苦を恐れ、生前の業常を悔みて泣き明しけるが思ひ直して大日不二の觀念に入り、目を閉ぢ齒を切りて間もなく勤め進みたれば、貴とやな、いつしか病惱は掻き拭ひたる如く打ち消ぬ、惱み臥したる形骸は、瑜伽微妙の寶印と現じ、圖らずも金剛不壞の正體を成就し、此の呻りごめく聲は、三密不思議の大陀羅尼と冥合し、寐たる床は毘盧本有の大道場と打ち成り、四重圓壇の大曼茶羅は、心上に嚴然として目前に燦爛たり、嬉しや忽ち

いふ。又心境一致融合したる處を瑜伽といひ、之れに依りて定力を得。○三密。身口意とが悉く秘密三昧に入るをいふ。○大陀羅尼。大真言といふに同じ。○毘盧本有の大道場。毘盧は大日如來の事。大日如來は法爾自然の法身佛なるが故に本有といふ。毘盧本有の大道場とは、即

有情非情同時成道、草木國土悉皆成佛の素懷を遂げたるをや。小法師原が聞き知るべき事にあらねど、かく有難き惠日に逢ひたる目出度さに、物語はするぞかしとて嬉し泣きに、打ち泣きく語られけるが、後には道業比類もなくおはしける由。其の外異國にも、殊宏の湯厄、蒙山の荊疾、何れも病に依て道心進み給ひける人々は間々多きぞかし。和僧達は左許りの小病に、けぎたなく云甲斐もなき有様かな、なごかは昔の人々にも劣るべきや、只今死なんすとも、正念工夫目出度て死に給はんには、眞の佛祖の兒孫たるべきぞ、かくいへばとて、重病受ん

ら大日如來說法の大道場のこと。

○殊宏の湯藥。明末の禪僧雲棲珠宏が湯傷を受けて病床に自覺したること、竹窓隨筆に出づ。

○端的。ホンタウホンマといふが如き俗語、或は正確的實と註す。正念の端的とは正念其物と云ふに同じからんか。○四威儀。行、住、

を待て參禪工夫せよとにはあらず、けなげに健ならんずる人々も、日夜に怠らず、彼の人々の如く用心したらんには、十人は十人、百人は百人ながら、學道成就せざる事はあるまじきぞ、兎にも角にも正念の工夫程、貴ぶべく重んずべき事はなき事なるぞとよ、正念の端的、未だ悟入なからん人々は、眞正の導師に見へて、第一に決定し給ふべし、決定あらん後は、四威儀の間、正念工夫打失せざるを第一とすべし、大慧禪師曰、那時カ是レ打失ノ處、那時カ是レ不打失ノ處、於テ一切所ニ如レ是、點檢セヨと、これは是れ從上の諸正念工夫親切の様子なり、これ則ち萬古

坐、臥。をいふ。

○大慧禪師。宋代の人、圓悟國師の弟子にして全錄八十卷あり、普覺禪師と謚す。

○那時。ドウイフ時といふ俗語。

○打失。煩惱を打失す。

○空劫。佛教にいふ四劫の一、壞劫の二十小劫終りて世界全く空に歸して更に世界の成立するに到る二十小

贈遠方之病僧書

五六

不易の正修なり、是れを直心とも佛性とも菩提とも涅槃とも無位の真人とも云なり、此の真人は空却以前、空却以後、少しも病氣もなく鼻もしみたる事はなき人なるぞ是を法華には久遠實成の古佛と稱嘆し給へり、南嶽の隨意願行に、昔在靈山名法華。今在西方名彌陀。濁世末代名觀音と釋し給へるも此の真人の事なるぞかし、此の人を供養し、此の人を尊信し、此の人に親近して打失せずんば、何れの病か治せざらん、何れの道か成せざらんや佛法中には病疲れたる老女、瘦悴けたる老夫なりとも、正念工夫間斷無くんば、無病堅固の有力の人とす、縦ひ

劫の間をいふ。

○南嶽。支那天臺宗の第二祖慧思禪師をいふ。

○身子。佛弟子中智慧第一の舍利弗尊者のこと。

○滿慈。佛弟子中辨說第一と稱せられたる富樓那尊者のこと。

○五家。臨濟、沩仰、曹洞、雲門、法眼の禪の五流をいふ。

贈遠方之病僧書

五七

七尺八尺の身財あつて、身子の智圓かに、滿慈の辨饒かにして三經五論を講じ得、五家七宗の奧義を究め盡して力周鼎を揚げ、眼寰宇を空じたりとも、正念工夫なからん人をば、臭爛膨壞の死人とする事なり、あひかまへて容易に心得べからず、寔に保ち難く、寔に守り難きは正念工夫の大事なるぞや、末代の悲しさは、人毎に名聞の心強く、利養の心盛にして、道心ありげに見せかけ莊り立れども、正念工夫決定の人は得難き事なり、増て正念工夫、相續不斷の人を求むるに、千人萬人が中に一人も無き事なるぞ、老僧十三歳にして此の事あることを信じ

十六歳にして娘生の面目を打破し、十九歳にして出家、
 三十五歳にして此の山に遁居す、今年六十五に向とす、
 中間四十年、萬事を放下し、世縁を杜絶し、專一に相守
 て漸く五六年來眞個正念工夫の相續は得たりと覺ゆるぞ
 檀那施主に輕薄追從し利養名聞を希望貧求しながら、參
 禪工夫せんとは寔に片腹痛き事なり、往々に師學ともに
 常住の潤澤を榮耀とし、多衆開熱を宗風とし、辨才利口
 を智慧と思ひ、衣食の結構を佛道に充て、尊大美麗を道
 徳とし、人の信仰を法成就の時なりとす、悲しみて尚
 悲しむべきは、得難き人身を名聞の奴婢に責使ひ、上も

○白衣。在家の人
 をいふ。印度にて
 は出家が黒衣を著
 け、俗家が白衣を
 著く。
 ○目連。第一の佛弟
 子中神道第一の稱
 ある目連と舍利弗
 さをいふ。鷲子は
 舍利弗を譯して身
 子或は鷲鷲子とい
 ふより名付けたる
 ○臘月三十日。臨
 終をいふ。

なき佛心をば妄縁の塵埃に吹埋ませて、此の招請、彼の
 供養には、似合はぬ綾羅絹帛を惜げもなく着飾り、得も
 せぬ禪道佛法を會釋もなく説散し、無智の白衣に對して
 は孔明子房が辨口を違ふし、苦汗の財施を掠め取には、
 目連鷲子の神通を得たり、暫時の名利を偷み求めて因果
 を信せず報恩を恐れず、臘月三十日、孤燈獨照半生半死
 の際に至つて泣うめき、七顛倒八狂亂、手脚の置處なく
 あがき死して弟子門徒の面ふせになり給はんは違ひはあ
 るまじきぞ、今の人々の心ばわにて、禪道修行の人とい
 は、何國の誰か佛祖ならざるものあるべきぞ、不思議

○斯る物すごき處にて六々。白隠が受老人を信州飯山に尋見し時の物話なれば、飯山の老人居所を指すなり。

贈遠方之病僧書

六〇

の因縁にてかゝる物すごき處に來りて一夏をも明し給ふ者を、何しに惡き事教へ申すべきや、世間は知らず老僧が破屋の内には、甘く心易き佛法はなき事なるぞ、只兎にも角にも修行者は吾身を高ぶり吾身を重んじ、我身を最負する程惡き事はなき事なるぞや、一年、狼の多く來りて此麓の里へ宛をなせし時に、愚老は七夜まで慮々の墓原に座し明したるぞ、是は彼等に取圍まれ、耳の根、喉笛など吹嗅ンする時に、正念工夫間斷ありや否やをためし試みん爲なり、蝨にもせよ水神にもせよ、男子たる者の思ひ立ち、取かゝりたる事を遂すや置べき、仕果す

○玄沙。字は師備雪峯に師事す、梁の開平二年十一月寂す。
○慈明。諱は楚圓金州の人、初め汾

やあるべきと思ひ定めて、如何なる飢寒をも忍び堪へ、如何なる風雨をも堪凌ぎ、火の底に入り水の底に浸りても、佛祖の開き給ひたる眼を開き、佛祖の到り給へる田地に到りて宗門の大事を參歇し、最後の奥義を徹了して十方參玄の納子を惱害し、釘を抜き、楔をうばつて以て佛祖の深恩を報答すべしと、歷劫不退の大誓願を憤發し給はひ、病何れの處にか湊泊せん、古徳の修行に一人として疎なるはなき事なれども、中に就て玄沙慈明などの幾多の艱辛を歴給へるは取分け貴とく覺ゆる事なり、油断し給ひたらば、果して相似の修行者になり給ふべきぞ

陽に師事して錯鏡
を受け、後諸方に
歴事す、道成りて
宋の仁宗慶歴元年
正月寂す。
○操履。行状とい
ふに同じ。

贈遠方之病僧書

六二

但し其の相似とは似せ者と云ふ事なり、誰やの人か不足
無き身に似せ者と成んと思ふ人は無き事なれども、好さ
法友の手引を受け給はず、道心深からずして少しばかり
の會處などを頼みて口を利き、人にも貴ばれ給はゞ見事
なる似せ者なるべきぞ、操履を慎み、正念を守りて事足
り給はずば、如何なる野の末、山の奥にても飢死、寒え
果給ふべき、黄金は菰に包みても黄金なれば、實の佛祖
の兒孫、神明掌を合せて尊信し、龍天頭を低て擁護す
べきぞかし、諂ひ屈みて財産を積み重ねて、千僧の葬儀
七寶の莊嚴あつて、幡蓋目を奪ひ、道場心を驚かしたり

○正受。普通に正
受老、といふ。信
州飯山に居る、白
隠の師事せし人。
○茲に又一方あり
云云。以下夜船閑
話に説けるが如き
養生法を述べたり

とも、閻王怒眼を張り、牛頭鐵鞭を燃つて相待んは苦々
しかるべきなご、戌の上刻より丑みつ頃まで物語りせら
れけるを、傍に侍りける兩三輩、只片時許りの心持にて
感涙肝に銘じ、慚汗肌を侵し侍りき。其の後病中なご
に此物語を思ひ出し侍れば忽ち慙愧の心起りて病苦も輕
く成行様に覺候故、あらし書付け遣はす事、延壽堂
中の人々、病中の道情の一助ともなれかしの心にて侍り
去り乍ら、如上は正受老漢平生受用底の施藥にして、甚
だ一味單方攻撃の冷劑なり。茲に又一方あり、尤も虛弱
の人に宜し、心氣の勞疲を救ふ事甚だ妙なり、上昇を引

○輒酥丸一劑。輒酥の觀法をいふ、夜船閑話に出づ。○諸法實相。萬有のすがたを、ありのまゝに觀じて、現象そのまゝ本體なりといふことを、諸法實相といふ、主として天台宗にていふ所の道理なり。

○我法二空。我とは世間にておれがといふ我見、法とは一切萬有をいふ

下げ、腰脚を温め、鷹胃を調和し、眼を明かに、眞智を増長し、一切の邪智を除く事大に効あり、輒酥丸一劑、諸法實相一斤、我法二空各々一兩、寂滅現前三兩、無欲二兩、動靜不二三兩、絲瓜の皮一分五釐、放下着一斤、右七味、忍辱の汁に浸す事一夜、陰乾して抹す、例の通り般若波羅蜜を以て調練し、丸じて鴨卵の大きさの如くならしめて頂上に安着す、初心の行者は藥種如何、斤兩如何を觀すべからず、只色香微妙の輒酥、鴨卵の大ひさの如くなる者我頂上に頓在すと觀す、病者此の藥を用ゐんと要する時、厚く坐物を敷き、脊梁骨を堅起し、目を收

我法二空とは眞理の上よりいへば、われが、おれがと執着する我もなく元より因縁所生の萬有は假有にして實有にあらずといふ、主として法相宗等に唱道せし理論。

○寂滅現前。寂滅とは涅槃の譯語、悟といふこと、坐禪に依りて此の身此のまゝ佛になるを寂滅現前といふ

めて端坐し、徐々として身心を洵定めて須く思惟すべし大凡生を保つの要、氣を養ふにしかず、氣盡の時は身死す民衰る時は國亡ぶるが如しと、此の語を三復し了つて正に此觀を成べし、彼頂上に安着する輒酥鴨卵の如くなる者、其氣味微妙にして遍く頭顱の間を潤し浸々として潤下し來つて兩肩及び雙臂兩乳胸膈の間、肺肝腸胃脊梁腎骨次第に沾注し、將ち去る、此時胸中の五積六聚疝癰塊痛、心にしたがつて降下する事、水の下にをもむくが如し、歴々として聲あり、遍身を流へ潤して下つて雙脚を温む、足心に至つて即ち止む、行者再び此の想念をなす

○放下着。兔や角と種々妄念妄想を抛擲せよといふこと。(公案あり)
 ○右七味云云。以上の七法を忍耐勉勵して實地に修行すべきをいふ。
 ○注意本文の修行法は夜船問話記述と對照すべし。
 ○唯心所現云云。精神作用に依りて吾鼻に香ばしき匂を嗅ぎ、身體に柔軟の物の觸ること

べし、彼の浸々として潤下する所の餘流、積り湛へ暖め、蒸して恰も世の良醫の種々妙香の藥物を聚め、是れを煎湯にして浴盤の中に盛湛へて我臍輪以下を潰浸すが如しと、此の觀を作す時、唯心所現の故に鼻根希有の香氣を聞き、身根妙好の輕觸を受け、身心共に調適なり、忽ち積聚を消融し、腸胃を調和し、肌膚光澤を生じ大に氣力を増す、若し時々此の觀を成熟せば、何れの病か治せざらん、何れの仙か成せざらん、此は是れ養性の秘訣にして長生久視の妙術なり、此の方始め金仙氏に起つて中頃天台の智者大師に至つて大に勞疲の重病を治し、且

を覺ふることを云へり。

つ其の兄陳奏が必死を救ふ澆末難遭の靈方なり、宜なる哉、此道今人知得する底希なる事を、老僧中頃道士白幽に聞く、効驗の遲速は行人の勤と怠とに在らく而已、怠たらざれば長壽を得、道ふことなけれ鶴林老去て大に老婆禪を説と、恐らくは知音の一見して手を拍して大笑するあらん、何が故ぞ、不臨亂不見、貞白操、不臨敗、不知義士志。

見性成佛丸方書

○見性成佛丸。見性成佛とは、自己
が本来具有せる佛
性の本源を見究め
て佛果を開くをい
ふ、本篇は師が寶
藥の效能書に擬し
て、此の見性成佛
を眼目とせる禪の
他に勝れたる所以
を説けるものなり
○直指人心。禪門
に於て佛果を得る
には他法を求め
ず、直ちに自己本
具の佛性を指して

私事は、小田原勇助と申して、生れぬ先の親の代から
藥屋でござります。推賣は天下御法度でござりますれど
も、先づ功能の一通り御聞き下されませ。私、賣弘むる
處の藥は、見性成佛丸と申して、直指人心入りでござ
ります。此の藥を御用ひなされ申すれば、四苦八苦の病
を凌ぎ、三界浮沈の苦も、六道輪廻の悲も安樂になり
ます。此の藥と申しますは、天竺の伽毘羅城淨飯大王の
御子悉多太子と申して生れながらにして七足歩み天上天

これを見性せんと
するものなれば斯
くいふ。
○二十八人目の達
磨大師。禪宗史に
於て迦葉尊者を第
一祖とし、達磨を
二十八祖とす。
○五家。前に出づ
○神光の云云。少
林の斷臂をいふ。
以下各祖師が苦行
の逸事を記す。
○百丈の鼻血。近
く禪苑瑤林註上に
出づ。

下唯我獨尊など、仰せられて各々様方が御存じの檀特山
の憂引れとは、其時藥種を把りに山におん入りなされま
して、難行苦行、其の後に五千四十餘卷四通りの藥法書が
出来ました。其の時御弟子の内十六弟子、並に五百人と
秀でた上手が出来まして、衆生の病を直す其の根元は成
佛丸で、此の藥を傳へられました。其の後天竺にて四
七二十八人ござりまして、二十八人目の達磨大師がさび
しく傳へられました。大唐にては、二三人、五家七軒
と別れましたが、兎や角とござりました。神光の臂の痛
み、玄沙の足の痛み、雲門のちんばもなほり、百丈の鼻

見性成佛丸方書

七〇

○千光國師。榮西禪師のこと。
 ○紫野大灯。大灯國師なり。大徳寺の開山、字は宗峯播磨の人、延元二年八月寂す。花園帝法を問ひ、興禪大灯國師の號を賜ふ。
 ○顯露丸。秘淨丸。佛敎を顯教密敎の二に分てば、密敎は眞言宗、其他は顯敎なり。こゝにいふ顯露丸、秘

血も止り、其の外數々ござりますれども中々申し盡されませぬ。吾朝にては千光國師始めて傳へられました、其の後に二十四人の妙薬師が出来まして其の後紫野大灯は天子様御用ひなされましたが、其の時、顯露丸、秘密丸と申して、賣薬師が出来まして成佛丸と功能を争ひ致されたが、勅命あつて三井寺、奈良、比叡山邊の賣薬師と禁裡にて論議致されたが、大灯が勝たれました。花園の鳳皇様は、美濃の伊深へ勅使を立てられ、關山國師を見出され、此の御薬を御召上らせ給ひ、御褒美として天子様の御盃を賜りました。花園屋と申すは即ち私本家でござります。此の薬の製法、先づ趙州の柏木を斧できり、六祖の臼ではたき、馬祖の西江水を汲み、大灯の八角盤で煉立て、白隠の隻手にのせ、俱低の一指で丸め、玄沙の白紙に包み、其の上書を禪宗臨濟郡花園屋見性成佛丸と記します。此の薬を丸呑に成されまると、から見識といふものをはきまして、一生毒が抜けませぬ、随分々々能くくかみこなしてあがりますと、行くも歸るも立つにも坐るにも、へその下へ呑込み置きますれば、たとひ天上に生れても樂しまず、地獄へ落ちても苦しまず又誹るではござりませぬが、今時は六字丸と申して發向

密丸とは當時の諸宗を指す。
 ○關山國師。大灯國師の弟子、妙心寺の開山なり。
 ○趙州の柏木。趙州和尚が如何が是れ祖師西來意と云へる間に答へて、庭前の柏樹子と答へし話則をいふ。
 ○六祖の臼、六祖慧能が米舂き人たりしに因む。
 ○馬祖の西江水。馬祖大師諱は道一

化を江西に開き道大に行はるゝに因んで西江水といふ

致しませぬが、是は朝飯前夕飯前後に御用ひなされまされば、凡夫の保養に成りますれ共、斷末魔の苦しみに中々役に立ちませぬ。又世間の死に仕間に念佛丸と申すは是でござります。此の薬には、代物が三錢宛入ります

○自隠の隻手。隻手に音聲ありやといへる公案。

が、私が成佛丸には、一錢も入りませぬ。先はあらく

○俱低の一指。近く無門關第三則に出づ。

さあ〜御用ひなれぬかと申ではかないません。

○玄沙の白紙。玄沙、僧を遣はして雲峯に書を送らしむ、雲峯紙を開けば只白紙三枚を見るのみ。大衆に呈示して曰く、會すや如何と

假名法語

○假名法語。日頃歸依せる某居士に道念を策進せしめんために興へしものなり。

示ニ居士

道情も進み勇猛精進の助けにも成るべき法語等これあらば、書付け候やうとの御事、毎度申越され侍れど、馳せ廻りたる假名物の法語などは、年來見及び聞き及ばれたる事どもに侍れば今更書付け進ずるに及ばず、申し進ずべき事に事を缺き、彼是れ見合はせ侍りけるに、此程珍らしき法語これありきと思ひつき、荒増し書載せ進じ候。毫釐も添減これなき物語に侍りぬ。少しも疑ふ心なく披

○提唱。提綱に同じ、要領を提げるといふ意味なり。

○辨道。前に出づ。

見致され、勇猛精進の一助ともせらるべく候。仔細は老父去年の秋、雲水僧侶の頼みに依りて、當國松岡といへる處に於て臨濟録提唱して侍りけるに、聽聞の緇徒、東西十三里、北は甲州境を限りて毎日聚會し侍りき。中就きて五六里西菴原と云へる處の人々、別して信心に聽受せられ、散筵の後に、三五七人伴を結びて晝夜おこたらず辨道工夫、心の任に勵み勤め、垂誠なん請けて侍りてんとて、老父か方へも見え來りける人々もまゝ此れありつる中に、山梨平何某と云ふ人聞わける、その所にておどらぬ豪家の主なるが、此の男ばかりは、人々諫め

○和尚の瞋拳を云云。和尚、鞭撻を受けんなごいふほどの意なり。

勸むれども聽受けたる氣色もなく、坐禪などは存じも依らず、去る物語などする席をば、窻かに遁げ走りこそすれ、修行などせんずる者とはつゆ見わざりけるほどに人々も、此の男には點をなんかけて見限り置きける。その噂は老父か方へも折りくは聞わ侍りき。先月の二十四五日の事にや侍らん、人を以て案内しけるは、菴原なる平何某にて侍る、和尚の瞋拳をけがし奉らんとて推參申したるにて侍る、然るべく申しなして見參に入れてたべなど、用がましく聞わける程に、愚老も立向ひ、珍らしや不思議の來訪に預かり侍る、子細や候ふべき、疾く

○入室。師家の室に入りて面會するをいふ。

○晝參夜參。晝夜に參禪するをいふ
○一枝半枝の坐禪坐禪の時、線香を焚くに因みて、線香一本半本の間の坐禪といふなり。

○見性。見性成佛丸に註せり。
○相應。道と心と相應するなり。

入り給ひてよと答へければ、顔色の勇狀なる、言語の折目たかなる見わたるばかりに低頭作禮して告て曰く、人がましき入室、事おかしくおぼさんも恐れあれど、平が身に取りては老師ならでは點檢したまはんずる方も覺わなさま、河々の水かさおち、渡頭の各々禁渡牌をひくを待ちかね、推參仕りたるにて侍る。扱ても去年の秋松岡の大會の後、我等の父老七八輩、互に伴を結び志を合はせ、晝參夜參、見る人感心するばかり貴と覺わ侍り、斯りける中に御覽の通り日頃平が陋懶なる、工夫は存じも依らず、一枝半枝の坐禪さへ終にかいまり居た

る覺わこそなけれ、修行の望みなどはふつと最初より思ひたわ侍り、下郎が心に竊かに謂へらく、夫れ見性の大事は禪門英傑の參徒、頭腦を鈍り身臂指を燒きて二十年するすら少分の相應も得がたしどころ聞き及びたるなれ。況や平か蒙昧昏愚なるをや。逆も仕課すまじきことを強めて取りかゝりて、果は人々に後指さしれやすらん、むげに口惜かるべき。遂げまじき事はせぬにしかず、左ればとて空しく光陰を送らんも淺ましく腹ふくる心地すれば、今日より密かに陰徳を冥々の中に積み重ねて以て子孫長久の計をなすべし。是れ平が分を知りた

○時節因縁。時機の來れるをいふ。

る悟なるべしと思ひ定めて、夫よりは忍びく徳行にもなるべき事どもを毎日二品三品乃至十五二十に限らずぬけつくぐりつ勸進しける程に、人々の坐禪せよ、工夫つとめよなと勸め導きたまふは結句かたはらいたく、人のさる物語など仕出すあれば、隙を見付けて遁けく、り侍りき。實に時節因縁と云へることに侍らん。昨二十一日の晩かた用事ありてさる者の許へなん行きしに、主なる者、椽鼻の柱に後さまに寄りかゝりて片膝立て、左の手をほゝつゑ突きて、右の手に何某法語とかや云へる假名草紙の真中かい掴みて、首打ち傾むけ、如何にも殊

勝にあいらしげに聲つくりいして、前後を忘れほろくと涙ぐみ讀みて居たる、蟲唾走り胸悪しかりけるが、きやつも亦た人々の中間入して、屏風引廻し欸冬味噌喰たる聲してそら眠せん下膳なるめり、筋なき後世物語を讀ませて、あつたら光陰を空しく送らせんより、手頃に似よりたる學者なれば、一所二所聞きとかめて打つて落し吾が家秘傳の徳行に引き入れ、一品二品づゝも善事執行なはせたらんには、是れまた上もなき徳行ならめと思ひ定め、笑ひながら驚歩してさしより、軒端に腰うちかけて落度あらば聞き出さんと、耳を澄し目を閉ぢ、手組し

○打坐。打は語勢を強めたる語

○打發。開悟といふに同じ。

○牙關奥齒のこと

○即今見聞云々。

自己本具の佛性を徹見せんとする状態をいふ。

○妄想。雜念に同じ。

て聞き居りけるに、彼の法語に書かれけるは、夫れ見性の大事は二年三年にして打發するあり、又二十年三十四十年歴るもあり、また一生打坐して打發すること得ざるもあり、若し人精神を憤起し、目を張り牙關を咬定し、即今見聞覺知の性、何れの所にか在る、是れ青黄赤白なりや、内外中間に在りや、是非々々見とつけずば置くまじぞと、勵み進まんとするとき、妄想の競ひ起ること潮の湧くが如けん、此の時少しも屈せず、單々に進みて一人と萬人と戰ふが如くし去らば、通身汗流れて黑暗萬丈の大深坑に落ち入るが如く心身ともに打失して呼吸の氣

○三祇。三阿僧祇の略語。菩薩が佛果を得るまでに歴る修行年限、其の長時間なること説き得べからず。

○五炷六炷の香。前の一枝半枝と同様の意義。

○恁麼。こゝには如何様にしての義なり。

息も亦泯絶し去らん。この時に當りて大事を決定すること、睡夢の初めて醒むるがごとく、豈に幾多の時日を歴るに及ばん。この故に起信論に曰く、勇猛の衆生のためには成佛一念にあり、懈怠の衆生のためには涅槃三祇にわたると説き給ひぬ。時々思ひ出して、二炷三炷の坐を打し、或は規矩を定めて、毎夜五炷六炷の香を守る。是れ等の類をみな是れ懈怠の衆生と名く、停より打ち見わたるは、如何に殊勝に貴とく、自からも天晴懈怠せず、退屈せずと思ふなれど、如何にせん、只だ是れ命根断せず、たとひ恁麼にして三祇劫數を歴るも見性は存じよら

ず自救も亦た不了なるべしと讀みつゝくるを、つくなく
 と打ち聞きて、心にひそかに思ひけるは、不思議のこと
 もあらんなれ、この事もし一日二日乃至三日の功勳にし
 て少分の相應を得るとならば、豈に一鞭を加へざらんや
 得力ののち、舊によりて彼の徳行を勧めたらんには虎に
 して翼あるものならんか。若し人、一日の功にして得る
 とならば、われ七日の功を積まば豈果さざらんや、男子
 たる者、思ひ立ちたる事を遂げずや置くべき、仕果さず
 やあるべきと思ひ定めて宅に歸り、日の暮るゝを待ち兼
 ねて一室を閉ぢ厚く座物を鋪いて結跏趺坐して凝然とし

○結跏趺坐。右の
 趾を左の股に置く

を半跏坐といひ、
 尙右の趾も左の股
 の上に置くを全跏
 坐といふ、何れに
 ても宜し。坐禪の
 足の組み方なり。

て坐すれば、しばらくありて妄想の競ひ湧くこと八島の
 戦のこどく、九國の亂に似たり。此に於て精神を震ひて
 妄念と相戦ふ、たとへば猛將一騎にして數千騎に取り圍
 まれたらんに、大喝一聲、一方を突き破りて馳せぬけん
 と挑み勵むが如く、又萬仞峻崖の高山に登るべきに、半
 途にして突き落さるゝが如し、彼の者勇猛の氣力ありて
 踏みしめ争ひ登ること、七八分にして突き落され、八九
 分にして蹴落さる、突き落さるれば逆らひのほり、逆ひ
 登れば突き落さる、此時一身の氣方を盡して勵み進む
 とき、覺ゆすこうくとして苦しみ惱むこと犒牛の病に

うめくが如く、眼を見張りて目蓋はなれ、齒をくいしばりて齒牙碎け落んとす。忽然として大風の乍ら止むが如く、一鍋の沸湯に一杓の冷水を洒くが如く、命根截断する事、紡車の緒の切れて飛ぶに似たり、此の時に當つて大地黒漫々、是れ生なりや、是れ死なりや、自ら都て分つこと能はず、呼吸の氣息一點もまた無し。生氣を打失するもの數刻、正に天明に到らんとする頃ほひ、纒かに大母指の陰々として痛むことを覺ゆ、忽ち蘇息し來ればその痛み忍ぶべからず、是れは嚴しく定印を結ぶ故に、二指さゝわて指頭の痛めるなり。急に定印を解かんとす

○分外。非常にと
いふ俗語。

れば、四支すくんで動くことを得ず、涕淚流れて頷に滴たり、兩眼開き張りて目たゞきすることを得ず、喜ぶ處は胸襟分外に清涼、分外に皎潔たること、雲霧を開いて旭を見るが如し。然りといへども一點の所得なく一點の所知なし是れ悟なりや、是れ迷なりや、人々に對して一事の説くべきなし、たゞ何となく大歡喜の心のみありて既に天明に到る、人々に對すといへども、目眩し口健忘の人の如し、家人且つ悲しみ、且つ怪しみて是れを問へども、たゞ目を弛りて是れを見るのみ、朋友來りて蹴鞠の場に誘ふ、平即ち伴ひ行きて諸友の中に入れて

○人事。時候の挨拶などをいふ。

○夜叉。佛教神話の魔なり。天夜叉と地夜叉とあり、天夜叉は虚空に飛騰す、八部鬼神衆の一。佛
○身心脱落。坐禪して三昧境に入り

たる時の心地をいふ。
○足を卓する。卓は立つること。
○草木國土悉皆成佛。涅槃經の文、草木國土にも佛性あるが故に成佛すべしとさいふこと

假名法語

八六

も人事せず低頭せず、たい目を張りて癡坐するのみ、諸人みな怪しむ、自ら謂へらく、誓て此度徹定の力を得ずんば、死すとも休せじと、日暮を待ちて再び又室を閉して兀坐す。妄想と戦ふこと昨夜の如し。舊に依りて齒をくいしばりて自ら謂へらく、傍人ありて燈火を點して吾が面を見なば必ず夜叉のごとくなるべしと、既にして單々に相進めば、久しからずして再びまた彼の境に入る、出入の氣息一點もまたなし、前後截斷し身心脱落して大死一番入靜なり、天明に到ること只片時の如し、忽然として蘇息し來れば、天地一指、萬物一馬、上片瓦の頭を

蓋ふなく、下、寸土の足を卓するなし、此外何の禪道佛法かあらん、覺えず呵々として大笑す、歡喜のあまり遙に來りて參禮するのみ、更に一句も和尙に對して呈露すべきなし、途中肩輿にて薩埵峠を過ぐ、遙に南溟の浩渺たるを見て、はじめて艸木國土悉皆成佛といふことを徹見す、請ふ師願はくば點檢せよ。予が曰く、即今佛何れの處にか在る。平即ち露柱及び庭階を目視す。予直に手を拍して曰く、兩掌相觸れて聲あり、却つて隻手の聲を聞くやと云ひて。一掌を立つ。平か曰く、聞得て分明なり。予が曰く、何を以てか驗とせん。平即ち良久す。曰く、

○作麼生。どうぢやなどいふ俗語

○憊麼。こゝにては左様といふ俗語。

○作家。禪門にて見處確實、自ら一家を作れる者を作家といふ。

聞く、ことは即ち甚だ聞く、唯半片を聞得たり、平即ち耳を掩ふ、予が曰く、猶ほ是れ未在。平拂袖し走り出づ、行くこと三五歩して却回して曰く、聞得たり。予曰く、作麼生。平即ち所解を演ぶ。甚だ諦當なり。予が曰く、時是れ細雨連日、爾如何が留め得て一滴も泄らさる事を得ん。平が曰く、未生以前に止め得たり。予が曰く、往々に憊麼に云ふ。平即ち疊を打つこと一掌。予吹くと兩三吹して、今時の作家に觸着すれば坐上大に塵を惹く。平又低頭して出づ、須臾にして歸り來りて曰く、和尚の爲めに十方刹土の細雨を止めて點滴もまたもらさず

家といふ。

○十方刹土。十方國土といふに同じ一切の國土の義。

○憊麼。散亂狼狽の貌。

○敗闕。失敗といふに同じ。

予が曰く、作麼生、平即ち所見を演ぶ。予微々として笑ふ、平歡喜にたえず、走りて惠昌禪尼の菴室に入りて前話を擧す、尼が曰く、居士少しきを得て足れりとすることなかれ、老尼今已に衰耄せり、人を得ざれば起つことを得ず、願はくば居士隻手を動かさずして尼をして起しめ得てんか。平茫然たり、尼が曰く、居士早々なることなかれ、向きに云ふことを聞かずや、少しきを得て足れりすと。平憊懼して寺に歸る。尼も亦亦隨ひて寺に入り來りて前話を擧して相賀し且つ大笑す。平忽然として入り來りて曰く、適來錯りて敗闕を取り了る、願はくば大

○青州布衫の話。
 超州從念禪師、因
 僧問、萬法歸一、
 一歸何處、趙州曰
 我在青州作二領
 布衫、重七斤。
 ○會元。五燈會元
 禪師の著。
 ○傳燈錄。佛國惟
 白禪師の著。右二
 書共に禪宗記傳の
 書なり。

姉再び問ふこと一遍せよ。尼即ちいはく、居士願はくば
 隻手を動かさずして老尼を起しめよ。平即ち所見を演ぶ
 尼大に驚きて舌を吐く。予即ち青州布衫の話を授與して
 曰く、祖々相傳底の秘訣なり、謹で子細に參究すべし。
 容易にすることなかれ。平即ち禮三拜して辭し去る。
 右菴原の山梨平何某、幾かに一二夜の苦吟に依つて大事
 を發明せしこと會元にも傳灯にも聞き及ばざるためしに
 て、實に去ぬる五月二十一日の夜の事にて侍る、返すく
 も最初の入理は急切に勵み進むに越へたることはあるべ
 からず、時々思ひいだして少しづゝ相勤むる分際にて

○因地下。前の
 篇に註せり。
 ○燈籠跳りて露柱
 に入る等總べて傳
 大師の頌。

は、中々三四年を歴るとも見性は存じも依らず、月日
 を重ねるに隨ひ、次第に疲れよわりて妄想妄念に勝つこ
 と能はず、果は念珠打ちつまくりて打泣き打泣き念佛す
 るより外は是れあるべからず、虫齒の藥にもならざる修
 行なるべし。誰れにもせよ二度三度も呼吸の息も絶え果
 て、自ら生死を辨まへぬほど勵み進まざれば、しかと
 したる得力は努々是れあるべからず。縦ひ一日因地下
 の得力これありて後も、動靜の二境を嫌はず、正念工夫
 の相續肝要たるべし。次に燈籠跳りて露柱に入り、佛殿
 走りて山門に出で、人は橋より過ぐれば、橋は流れて水

假名法語

九二

○疎山壽塔。僧爲
 師造壽塔了來白
 師。師曰、汝將幾
 錢與匠人二僧云、
 一切在和尙、師云、
 爲將三文與匠
 人好、爲將一文
 好、若道得、與
 吾親造壽塔、其僧
 茫然云云
 ○南泉遷化。碧巖
 等に出づ。
 ○鹽官。鹽官和尙

は流れず。南に向ひて北斗を見る等の語話、掌上を見る
 が如く分明に見得すべし。而して後に最後向上の一着あ
 り、之を法窟の爪牙奪命の神符といふ。謂はゆる疎山壽
 塔の因縁、南泉遷化の話、鹽官犀牛の扇子、翠巖夏末の
 話、乾峯三種の病、是れ等の因縁逐一透過し了りて、萬
 里の異郷に妻子の面を見るが如くならざれば、即ち真正
 參玄の上士と稱することを許さず。右菴原の一件聞きお
 よびたる人々は、僧俗ともに俄かに精進勇猛の精神を振
 ひて、勵み進むこと前日に十倍し待る。然らば則ち是れ
 に過ぎたる法話はあるべからずと、荒増し書付進し候。

一日喚侍者爲
 我將犀牛扇來、
 侍者云、扇子破也、
 官云、扇子既破、
 還我犀牛兒來、
 侍者無對。
 ○翠巖。翠巖和尙
 夏末示衆云、一夏
 以來爲兄弟說話
 者、翠巖眉毛在麼
 ○乾峯。和尙上堂
 曰、法身有三種病
 二種光。須是一透
 過始解穩坐地。云
 云

文字の烏焉、語路の謬も多く侍れば、努々他見之れある
 べからず。穴賢。

辻談議

○辻談議。明和年
間刊版したる本書
の序に戲言細語第
一義に歸す、何況
んや法説書説をや
先師古稀を過ぎて
後、舌劍難辯、恐
ろくは法苑初機に
及ばざることな、
是に依て丙寅之夏
致々書を編し名け
て辻談議と曰ふ、
所謂る六道之衝衛
是れ菩薩の道場、
禪定を起たずして
能く同事の攝に入

實相眞如の日輪は、生死長夜の闇を照し、本有常住の月
輪は、無明煩惱の雲を拂ふ。勇猛の衆生の爲めには成佛
一念にあり、懈怠の衆生の爲めには涅槃三祇に渉る。是
れは是れは、何れも云ひ合せて今日は大勢よふ見えられ
た、近頃奇特にありやるよ。云ふに及ばぬ事ながら、去
りとしては大切の時節なるぞや、推付け生死到來三途の舊
里にたち歸つて、叫喚、燒熱、黒繩、衆合、紅蓮、大紅
蓮の難所へ追ひ落されて、無量恒沙の苦患を受くる事は

る者歟とあり。
○端由。事故とい
ふに同じ。
○神といひ佛とい
ふ云云。諸曲松尾
の句を引けり「神
と云ひ佛といひ、
唯是れ水波の隔に
て、本地垂跡と顯
はれ」云々とあり
○十力調御。十力
とは佛の世に超越
したる力に十種あ
るをいふ。調御は
調御丈夫の略にて
佛の十號の一。

面りなるぞや。相構へて油断これあるべからず、向さに
云はゆる實相眞如の日輪は生死長夜の闇を照すとは、昔
し禁庭に端由有りて、内宮へ勅使を立て神慮を窺はせた
まひける時、恭なくも天照らす大聖神宮、一四句の偈を
以て答へさせ玉ひける神勅なり。此の時にこそ神と云ひ
佛と云ふ、唯是れ水波の隔てなるとは初めて思ひ知られ
たるぞや。さる程に十力調御の如來も、勇猛の衆生の爲
めには成佛一念に在り、懈怠の衆生の爲めには涅槃三祇
にわたると説き置かせ玉ふ、作廢生か是れ即坐成佛の一
念とならば、唯是れ勇猛精進の一刹那ならんのみ。懈怠

○一刹那。一瞬間といふに同じ。
 ○菩提心。菩提とは悟といふこと、こゝには菩提を求むる心といふ。
 ○三毒。貪・瞋・癡をいふ。
 ○身三口四。殺生偷盜、邪淫は身にて行ふ三悪行、これを身三といふ。口四とは兩舌、惡口、綺語、妄語の四悪行をいふ、これに貪、瞋、癡の

の衆生とは誰ぞや、我れも人も偶々受けかたき人身を受け、逢ひがたき佛法に逢ひながら、夢幻の如く千年も百年も生き果つべき心持ちにて、食ひたいやうに食ひ、飲みたいやうに飲み、寝たいやうにいね、あそびたいやうに遊んで、芥子ばかりの菩提心もなく、一升の事には五斗ばかりの腹を立て、五文か事には五貫ばかりの氣をもみ、頂上より足のうらまで全體、三毒五欲五臟より六腑を貫いて、總に是れ貪欲、瞋恚、毎日朝よりくれにいたるまで、身三口四の十悪をつくり、かさねて負ひかたけて冥途に入る、其の初め死する時は、何の正體もなく、

怠にて作る三悪行を加へて十悪とす。

○分量も無き。際限なしといふに同じ。

濃く寝入りたる如く何の覺えもなく、少らくあつて幽かに性根つきて目を開けば、いつかく冥途に落ち入り、死出の山、三途の河原など恐しき難所の、目ざすも知らぬ暗き闇路を、おぼろくと五里も十里もたとり行くよと思へば、分量もなき廣き野原に出でぬ、此の所は月日の光はなくて大火事場の如し。是れ皆焦熱、大焦熱の猛火の焰のどつと燃えあがるものなり。其の中に罪人どもの透き間もなく群り居て、わつと泣き叫ぶ様、あさましや、かなしやな。我れくは、はからずも斯くおそろしき惡所に沈みたるぞや、娑婆にて斯くおそろしき處あり

と露知らざりしくやしきよ。夢になりとも知りたらし
 かは、身を捨て命にかけても後世の願ひやうも、菩提の
 求めやうもあるべきものを、邪見惡智の人々の、常に天
 堂地獄などいへるは、根もなきそらごとなるぞや、其の
 證據には、開闢より以來、終に一人も地獄くるしとて立
 ち歸りたるものなく、終に捨文一つ遣したる者なし、是
 れ決定して地獄天堂なき現證なるぞや、縦ひ又有りとして
 も左ばかりの罪作りたる覺えもこそなけれ、人は殺さず
 火は付けず、地獄へ落つべき種こそなけれ、若し罪なき
 もの落する地獄ならば、それは是非なき次第なるぞや、

人なみ人なみなるものを、我れも人も、貴きもいやしき
 も、知るも知らぬも諸ともに手を取り合ふて落つべきは
 と云ひしを、口惜や、面白く賢き事宣ふ人かなと、貴く
 有り難き事に思ひなして、偶々うけがたき人身を受け、
 平生萬劫にも逢ひ難き佛法に逢ひながら、何の辨へもな
 くさながら牛馬同然の心持にて、やみくると三途に歸る
 くやしきよ、今はせんかたこそなけれ、見わたせば、貴
 きも賤しきも、老いたるもわかきも、知るも知らぬも、
 皆盡く猛火の底に在りて泣き苦しむ聲は、聞くに膽裂け
 心碎くるが如し、いにしや貴き聖の、常に嘆かせ玉ひけ

○途に入り
○閻浮。閻浮提の略。此の世界をいふ。

○奈落。地獄なり
○刹利も首陀も。
共に印度四姓の一にして刹利は王及び武人の階級に在

るは、一度三途に入りぬれば、二たび歸る事ぞなきと念佛させ玉ひけるよし、實に貴き御教へなるとは、今こそ思ひ知られたるぞや、又いつの世に閻浮に歸る事のあるべき、喉を濕ほすに一滴の水なく、口に投するに一粒の米なし、四方八面、盡く猛火なれば、立ち忍ぶべき所こそなけれ、見渡せば、あれにて泣き苦しむ玉ふは、いたはしや我が父うへにておはずぞや、此方なるは、まさしく我が妹なるぞや、あなたにて一處に責め苦しめられ玉ふは、上もなき貴き方々と見えさせ玉ふ、いかなる御錯ありてか斯くまで辛き目を見させ玉ふやらん、昔し延喜

る者、首陀は最下級の農業屠殺に従事する賤民。

○阿闍梨。僧の敬稱。
○水鳥樹林云々。
極樂淨土の水波鳥聲樹林の颯々たる響が悉く佛法僧の三寶の音聲を爲すといふ阿彌陀經の文を引く。

の帝様の、簾が岩屋の日藏上人に對して、云ふならく奈落の底に沈みては、刹利も首陀も替らざりけりと詠させ玉ふも、直に今日のあたりなるぞや、宮も葉屋も大名も高家も地頭殿も代官殿も庄屋も名主も、皆盡く猛火の底にわつと泣き叫ぶ、中にも出家沙門圓臚方袍の尼法師などの、在俗の人々に劣らじ負けじと、叫喚、衆合、黒繩、無間の底にしつみて苦しむ玉ふ、なかにも紫衣や紅衣の、僧正よ、阿闍梨和尚よ大善知識よなど、貴き人々の、おそろしき獄卒の杖にうたれて泣き苦しませ玉ふを見奉れば、一際に悲しく最愛しくこそ覺ゆれ、袈裟に

て談議法談などに、極樂よ浄土よ水鳥樹林よ念佛念法よ
 など、上もなき有り難き事とも説かせ玉ふを聞ては、我
 等如きか境界には分に過ぎたる事どもなるぞや、さばか
 りの高き望みは詮なき事なるぞと思ひ切つて、往生浄土
 の望みはさら／＼なかりけるぞや、かくおそろしき所あ
 りと少しなりとも知りたらしましかば、豈に夫れ片時も油
 断すべきや、身を捨て命にかけても後世助かるべき道し
 あらば勵み求むべきものを、口惜の今のなれのはてやな
 最初、此の處へ覺えず落ち入りたりし時に、且つ驚き且
 つ苦しみなから思ひけるは、世に恨めしき物は世の中に

○止観。珠林。天
 台大師の著摩訶止

數も限りもなき出家沙門の人々なるぞや、かゝる苦しき
 所ありと、少しなりとも教へ給はゞ、かゝる不覺はとら
 ざらましを、詮なき極樂咄をのみ仕聞かせたまひける故
 今此のはてしもなき惡處にしづみけるぞや。かへす／＼
 もうらめしきは、世間の沙門法師ばらなるぞやと恨みか
 こちけるが、よく見れば彼の沙門法師ばらも、かゝる所
 は露知り給はざりけるにこそ、兎にも角にも詮方なきは
 われ／＼が今のなれの果なるぞやなど、みなもろとも
 聲も惜まず泣き叫ぶ聲は、天も崩れ落つべくこそ覺ゆれ
 とは、彼の止観、珠林、十王經などに説き宣べおかせ玉

觀と、法苑珠林をいふ。
○十五經。地獄の事を詳かに説ける經。

ふ大略なるぞや、人々よ、油断し玉ひぞ、油断し玉ひたらんには、をつつけ憂目を見給ふべきぞ、良薬は口に苦く、忠言は耳に逆ふと申せば、尋常の極樂咄ほどには面白くは覺さじなれども、大地は打ちはすすとも違ひなき物語なるぞや。

時に聽衆に一人あり、講座間近く進み出で、有り難や貴やな、這回如何なる勝縁にや、かゝる不思議の勝會に逢ひ、未曾有真正の所説を承る事、かへすくも有り難けれ。澆季末代の習ひ、筋なき賤賣の鄙僧の、ぬれ手に粟の極樂咄をのみ聞きて、來世は心易き事にのみ覺えて、

毎日限りもなき罪業を積み重ねて、懲りもなく、もとの三途の舊里へ立ち歸りて、無量却數を経て果しもなき苦患をうくる事は露知らで、孩提の童子の無智なるが如く、牛羊犬豕の昏愚なるに齊しく、徒らに日々衣食をのみ求めて、飽き足に果てしもなく、我れも人も、やみくると受け難き人身を失ふ事、飛彈の邊土の我々にかぎらず、大凡扶桑六十州の間、西は筑紫博多の浦、東は都賀留合浦の果て、京も田舎も押し並べて、此の經の影にて佛になり、此の佛の徳により淨土に生る、一唱彌陀佛、即滅無量罪と有るからに、罪は何ほど作りても消え易きもの

を、何程放逸に暮しても佛に成りやすきものごと心得て、
 心に任せて罪業を積み重ねて、何のわきまへもなく月日
 を送りて、貴さも賤しきも皆盡く惡所に墮する世の中に
 斯く未曾有の法會に逢ひ、大に驚き恐れて、俄に睡夢の
 覺めたるが如し、去りながら、唯此の儘にて捨て置きた
 まは、何を便りにか生前限りもなき罪障を滅し、果し
 もなき惡趣を免かるゝ事を得ん、たとへば、人の親の其
 の子を教へて云はく、汝が輩、各々勵み進んで各々家業
 を勤めよ、必らず怠る事なかれ。油斷したらんには、未
 には必らず貧困に苦しめられて、辛き目を見るべきぞ、

相かまへて油斷する事なかれと、種々教諭せんに、其の
 親兼ねて商法を勤むべき子には、宜しく金銀の本手を渡
 し、農業を勤むべきには膏腴の田畑をゆづり與へて、而
 して後に汝等常に勵みつとめよ、油斷することなかれと
 云は、頭を叩いて命に隨はん、若し本手を與へず、田
 畑を譲らず、農を勤めよ、商を勵めよと云はんに、其子
 何を便りとしてか農商を勤めん、今、師、我が輩に對し
 て、勤めよや、油斷する事なかれ、油斷したらんには、
 死後には必ず惡所に墮すべきぞと教へ玉ふは、さながら
 金銀の本手を與へず、田畑を譲らず、只家業を勤めよ、

油断ばしすなと教ふる親の如し、我が輩も亦左の如し、何れの道を修し、如何なる善を行じてか、油断なく勵み勤めてか、未來を助かるべきや、願はくば未來を助かるべき道しあらば、精しく教へ玉ひて、彼の恐ろしき惡處を救ひ助け玉ひて、熟らく願ふに、世間一切の出家沙門を稱して、佛法僧の三寶の一數なりと歸命し尊信する事は、常に無量の法財を積み貯へ、勤めて大法施を行じて一切を利益し玉ふ故なり、我れも人も罪も報も曾て知らず、死して三途に墮する事も亦た知らず、恰も赤子のはらばひして井に赴かんに、盲者二三人其の傍に在りと

○三途も六趣も云云。三途は三惡道の事。地獄、餓鬼、畜生なり、六趣は六道ともいふ、これに修羅、人間、天上を加へたるもの

○大還丹。起死回生の大仙舟。

いへとも、夢にも曾て知らず見ざるが故に、救ひ助くる心なきが如し、末代の出家沙門も亦たしかり、因果應報も曾て知らず、三途も六趣もさらく辨へなき故に、さながら盲者の赤子を救ふ心なきが如し、和尚、大慈大悲宜しく是れを憐察し玉へ、予が曰く、善哉、間ふ事、相構へて油断し玉ひぞ、油断し玉ひたらば、かならず三途にしづみ玉ふべきぞと唯云ひすておきたらんには、左ながら赤子の井に赴くを見て、危い哉、此の子は果して井に落つべきぞとのみ云ひて見捨ておくが如し、我れに神仙不死の大還丹、即坐成佛の秘訣あり、眉毛を惜まず汝

○三毒五欲。前に註せり。
 ○六趣に輪廻し云。衆生が要業の力に牽かれて、六道を車の輪の廻るが如く此處彼處に生れ替るなふ。

が輩に傳與せん、謹んで精神を凝らして聽受じ、打失する事なかれ、汝が輩、即今外面五尺の形骸、男女あり、僧侶あり、老幼あり、尊卑あり、媚醜あり、各々互に異なり、こゝにおいて憎愛、妬害、慳吝、執着、雲霧のめぐり湧くが如く、波浪の漲り飛ぶが如し、三毒懷に溢れ、五欲胸に凝る、日々多少の惡習を積み重ね、晝夜に六趣に輪廻し、死しては必ず三途に墮す、叫喚、衆合、黑繩、無間の大苦患一身に聚まり責む、三祇百劫を経て休罷有る事なし、其の受苦、心も言葉も及ふべからず、佛の云く、一切地獄の衆生の苦患、我れもし詳かに是れを説か

○閻浮提。前に註せり。
 ○八難。三途と北隣單越、長壽天、饑盲瘡癩、世智辯聰、佛前佛後以上の八の中に生れたる衆生は佛説を聞なく得ざるが故に八難といふ。
 ○如來地。佛の境界といふに同じ。
 ○涅槃の彼岸。金剛經に「生死は此岸たり、涅槃は彼岸たり、煩惱は中

ば閻浮提の衆生聞き得て、皆盡く血を吐いて死すべしと寔に恐るべく、まことに慎むべし、若し人、如上三途の苦域を透過し、八難の險處を超過し、一起に如來地に直入し、涅槃の大彼岸に至らんと欲せば、謹んで精を靜め心を凝らして、汝が臍輪氣海丹田の間を點檢せよ、全く男女の相なく僧侶の形なし、老幼尊鄙、貧富媿媚一點の痕跡なし。是れ彼の黃成子かいはゆる至道の精香を冥々たり、至道の極昏々黙々たる者なりや、こゝにおいて單々に點檢し、仔細に照顧して晝夜に怠らざる則は、いづしか思想盡き妄情泯滅して、玉盤を擲摧し、氷樓を推

滝たり」と見ゆ。
 ○表裏精麟。大學に出づ。
 ○身心脱落。永平寺開山承陽大師が如淨禪師に見えし時、一夜如淨が參禪は身心脱落也と示せるを聞いて忽然として大悟し、直ちに方丈に至りて焼香す、如淨因て曰、焼香の事作麼生、師曰身心脱落、如淨曰身心脱落、脱落身心。

倒するに齋ふして、たちまち身心ともに打失せん、此において轉た進んで退かざる則は、計らずも一旦瞎然として貫通して、十方虚空なく大地寸土なふして、事物の表裏精麤盡くさすと云ふ事なけん。是れ彼の永平の謂はゆる身心脱落、脱落身心。直に是れ古人の謂はゆる理盡き言葉窮つて技も亦た極る、鳳、金網をはなれ、鶴、籠を脱する底の好時節、隻手の聲を聞く事、白晝に掌上を見るが如し、長河を攪いて酥酪と成し、荆棘を變じて栴檀林と成し、鐵を轉じて金と成す底の時節、人間天上の善果是れに如かず、縦ひ汝萬戸侯の富貴を得るも、黄梁一炊半

○鳳雛金毛。江湖集に出づ。
 ○攪長河云云。虚堂錄に出てる句
 ○黄梁一炊。近く諺曲部にあり。
 塵生が黄梁を一炊する間に一生の榮枯盛衰を夢みたる故事。
 ○流轉常没の凡夫善導大師の觀經疏に曰く。一には深く信ず、自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠却以來、

熱の夢、富四海を保つも、死すれば必ず捨て去つて惡趣に入る、是の故に言ふ、富は是れ一生の財、身滅すれば即ち随つて滅す、智は是れ萬代の寶、命終れば則ち隨つて行く、大凡世間一切諸有の有情、王侯より庶人に到り老幼尊卑僧俗男女、馬牛羊豚、豹狼麋鹿に到るまで、正因佛性の大事を具足せずと云ふ事なし、是れを實相眞如の日輪と名け、本有常住の月輪と云ふ、是れを失する則は、六趣輪廻の苦衆生、流轉常没の凡夫となり、忽然として是れを得る則は、たちまち無上正覺を成して三界無比の大聖と成る。十力調御の如來と同じ、此れ等の大事

常に没し常に流轉して出離の縁あることなし云云。
○一洞空しき谷の響云云。諸曲山姥に、「一洞空しき谷の聲、杓に響く山彦の、無聲音を聞くたよりとなり」とあるを引げり。「一洞空しきとは谷の空洞をなせる處に反響の満ちたるをいふ。無聲音とは、莊子に「冥々に視、無聲に聞く……無聲の中獨聞く事利す」とあり。

注談讀

一一四

を明らかめしんがために、我れ常に人に勸めて隻手無聲の微妙音を聞かしむ、是れ彼の山姥が謂はゆる一洞空しき谷の響は無聲音を聞くたよりとなるとは、是れ此の隻手の聲を云へり。今日は是れまで、明日また來りたまへ。あめあこしあめあこし。

主心お婆々粉引歌

○主心お婆々粉引歌。凡そ心は一切諸法の本源にして未だ煩惱に冥まされざる自己の本性は吾主人公なりといふ禪門の見地より、此の本性を主心と名けて其の主心、即ち本性をお婆と爲して本性の靈妙なること、本性を徹見すべきこと等を粉引歌にうたはれしものなら

有がたいぞや天地の御恩。あつさ寒さの程までも。夜と晝ともなふてはならぬ。ひるは働く夜は体む。雨露の御恩で五穀もみのる。すゑの野山の草木まで。君の御恩は山より高い。賤がわらやの果までも。繁昌めこれよ萬世までも。風に草木のなびく様に。わすれまいぞや御主の御恩。遠きあの世の後までも、親の御恩は海よりも深い。恩を知らねば犬猫ぢや。孝行する程子孫も繁昌。親はうき世の福田ぢや。心短機な殿子の癖に。主の専途にや遁

ん歎。

○有がたいやぞ云。以下六句先づ天地造化の恵みを感謝す。

○君の御恩は山より高い。以下十句君父の恩の高きことを述べて、此の君に忠を盡す能はざるは主心無きに依ると起せり。

○太公望。周の文王、武王の時に仕へしが故に文武といふ。

○三略の書。六韜三略なり。

○九郎。九郎判官源義経。

○神止まります云。以下三句、此の本性、即ち主心が神道儒道にても骨目なることをいへり

○新民。大學三綱領の一。

主心お婆々粉引歌

一一六

はしる。忠といふ字を能く見れば。外へちらさぬ此の心。五尺餘のからだは持てど。主心なければ小童ぢや。武藝武術も第二の沙汰よ。とかく主心がおもじやもの。主心なければ明家も同じ。狐狸も入りかはる。周の文武の太公望が。云ふて置かれた名言がござる。武家の大事の三略の書に。驚悲亂りに起るはとうじや。武士に主心の定まらぬゆる。主心定まる修行じや。弓は西鎮八郎殿よ。鎗は眞田よ太刀打や九郎。縦ひ此等を欺く人も。主のいまは専途の時に。主心なければ腰ぬける。主心至善二つはないぞ常に正しき此心。唐の大和の物知よりは。

主心定まる人が好い。武士を絹布で食はせて置くは。主の専途の一と小くち。多藝多能も先づさしおいて。主心定まる場所を知れ。主心至善定まる時は、持齋持戒も外にやない。有難いぞや主心の徳は、太刀や劍の刃もたぬ。弓も鐵砲も届かぬからに。敵と云ふ字は更にない。空も月日も海山かけて。土も草木も皆主心。神とまります高間が原も。五欲三毒ないところ。民を新にするとは云へど。至善定まるまでの事。出家も沙門も高位も知者も。主心なければ皆民じや。宮はわらやよわらやは宮よ。主心一つが潮さかひ、上下萬民主心があらば。治めされ

主心お婆々粉引歌

一一七

ども世は萬歳。嬉し目出度や主心の徳で。うたぬ隻手の
 聲も聞く。悟り迷ひを口には説けど。主心居ちにや何じ
 ややち。袈裟や衣で見かけはよいが。主心据はらにや
 ひよんな物。四國西國廻るもよいが。主心無ければ空道
 よ。主心丹田氣海に満つりや。仙家長者の丹藥よ。丹を
 鍊るには鍋釜入らぬ。元氣丹田にすはるまで。不死の丹
 藥望みな人は。常に氣海に氣をあげ。虚空界より長壽の
 ものは。氣海丹田に住ひ主心。氣海丹田に主心が住めば。
 四百四病も皆消ゆる。主心お婆々はいくつになりやる。
 わしは虚空とおないごし。虚空おやじは死なりよと儘よ。

○氣海丹田。夜船
 閑話に註せり。

○無間云云。無間
 は無間地獄、修羅

わたしやいつでも此通り。山河大地を我子に持てば。○
 しに不足な事はない。武士の身の上は覺悟がおもじや。
 生て一たび死ぬがよい。生て死ぬるは容易い事よ。主心
 お婆々に出逢て問へ。主の御恩で仕立たからだ。喧嘩な
 ぞする不覺者。武士は憶病も忠義の一つ。一度主君に上
 げおくからだ。我身ながらも自由にやならぬ。大事々々
 と守りましょ。内證つき合榜輩同士にや。狗と云ふとも
 腹立つな。主の爲めなら無間の底も。修羅も紅蓮も辭退
 せぬ。命根りに切込む所存。是れが勇士の常の住。主心
 お婆々はどこらにござる。氣海丹田の裏店借りて。氣海

は修羅道。紅蓮は地獄の名。
 ○臍の下から二町下。氣海丹田共に臍下一寸五分乃至二寸程なることをいへり。
 ○十方法界。天地宇宙をいふ。
 ○實相無相。實相は無相なりさて、宇宙の本體は平等にして差別の相なきをいふ。
 ○生死涅槃。生死は迷をいふ、涅槃

丹田はどこの程ぞ。臍の辻から二町下。臍のくるりに氣が聚まれば。とりも直さず大還丹よ。最も貴とや還丹の徳は。須彌も虚空も碎けて微塵。十方法界實相無相。見られ人も無く見人も無い。生死涅槃もきのふの夢。煩惱菩提の迹もない。墮して苦しむ地獄もないが。往いて樂しむ淨土もないぞ。此に一期の大事がござる。眞正得悟の智識に逢はや。世間多少の修行者共が、二三十年難行苦行。思ひはからず此場に到りや。もはや悟つた大際あいた。おらは是れから心の儘ぢや。殺生偷盜も氣遣ないぞ。五逆十惡好いなくさみよ。因果むくひもないから

は悟なり。
 ○殺生偷盜。十戒の中の一と二。
 ○邪見斷無の我儘悟り。獨斷的に人は一世限りのもの因果、來世等なしと定むるをいふ
 ○支竺扶桑。支那天竺、日本。

と。邪見斷無の我儘悟り。よその見るめも恐ろしや。勵み求めし見性の法も。いまは地獄の種となる。もとの主心は皆消えうせて。魔縁天狗が入りかはる。過去の縁因拙い故に。終に眞正の明師に逢はにや。悟後の修行の奥儀も入らぬ。もとの凡夫がいつそ増し。今は澆末法滅の時。邪見邪法の起るも道理。支竺扶桑の三國ともに。眞の禪宗は地に落果てし。殊に怪しき邪法がござる。曹洞黄檗濟家も共に。善知識ぢやと呼ばらるゝわろも。人に對する説法を聞けば。眞正向上に禪法といふは。坐禪觀法に用事もないが。佛經祖錄も更々入らぬ。木地の儘な

が眞の佛。佛求むりや佛に迷ひ。法を求むりや法縛をう
く。佛果菩提も夢中の夢よ。生死涅槃も飛ぶ鳥の跡。好
さも悪しきも皆打すてし。木地の白地で月日を送れ。障
りや濁るぞ溪河の水。問ふな學ぶな手出をするな。是れ
がまことの禪法だ程に。見ぬが佛ぞ知らぬが神よ。是れ
を聞くより彼の大勢の。無智や懶惰の役坐のやから。扱
ても貴い教化でござるもは是れから我々どもは。思ひよ
らざる生佛ぢやぞ。くふてはこして寐るばかりじやと。
並び睡るを脇より見れば。大勢並んで櫓を推すごとく。
如何なり行く身の果やらん。佛法破滅の大前表よ。悟後

○役座のやから。
紐にして役に立た
ぬといふ俗語。

○昔春日の云云。
近く沙石集第一に
見ゆ。

○俱盧伽佛。釋迦
佛以前に於ける七
佛中の第四佛。
○山まんば女郎云
云。諸曲山姥に、
法性経そびえては
上求菩提をあらは
し、無明谷深きよ
そほひげ下化衆生

の修行とはどの様の事ぞ。お婆々知てならうたふて見や
れ。是れは大事を御尋ねそふよ。五百年來すたれた法じ
や。諸善知識も知らぬが多い。悟後の大事は即ち菩提。
昔春日の大神宮の。解脱上人に御告がござる。およそ俱
盧孫佛より以來。たとひ天下の智者高僧も。菩提心なき
や皆々魔道。菩提心とはどふした事ぞ。山まん婆女郎も
うたふておいた。上求菩提と下化衆生なり。四弘の願輪
に鞭打あてし。人を助くる業をのみ。人を助くにや法施
がおもじや。法施は萬行の上もりよ。有がたいぞや法施
の徳は。たとひ佛口も盡くされぬ。法施するには見性が

を表す云云とあり
上求菩提下化衆生
とは、進んで菩提
を求め、悟りて後
衆生を濟度する事
○斷見外道。獨斷
家といはんが如し
○千重の荊蕪叢云
云。以下すべて禪
者の透過すべき公
案の名を擧ぐ。
○祖師西來意。無
門闢卅七則等。
○黃檗運大禪師。
黃檗希運禪師をい
ふ。

○倩女離恨。無門
闢卅五則を見よ
○婆子燒庵。昔婆
子有り、一庵主を
供養して二十年を
經、常に其女を遣し
て飯を持って送る、
一日女をして僧に
抱き付かしてめ曰、
く如何と、僧曰、
古木寒巖に倚て三
冬煖氣無しと、女
子歸來して老婆に
傳ふ、老婆曰、我二
十年此の俗漢を供
養せりと、僧を迷

主心お婆々野引歌

おもじや。見性はかりじや乳房が細い。細い乳房じや子
は出來ぬ。よい子なければ跡絶わる。隻手音聲求め得て
置て。此て休すりや斷見外道。次に千重の荊蕪叢を。殘
る事なく皆透過せよ。お婆々死んでも何處へござる。と
めてたもれよ帆かけ船。四十九曲り細山路を。直に通ら
にや一分たぬ。風の色香はどのよな物ぞ。次に夢中の
祖師再來意。最後萬重の關鎖がござる。之れが禪者のむ
なぶく病ぞ。關鎖なければ禪宗は絶わる。命がけても皆
透過せよ。ひかし黃檗運大禪師。常に嗟悼し惜ませ給ふ。
扱ても午頭山宗融大師。常に横説豎説はすれど。未だ向

上の關鎖をしらぬ。關鎖なければ禪ぢやない。鯉魚も龍
門萬重を超る。野狐も稻荷の鳥居は越すぞ。流石禪宗
の飯やくいながら。關鎖とはらにや分立たぬ。疎山壽塔
に牛窓樓。乾峯三種に犀牛の扇子。白雲未在に南泉遷化。
倩女離魂に婆子燒庵よ。是れを法窟の爪牙と名づけ。又
は奪命の神符とも云ふ。此等逐一透過の後に。廣く内典
外典を探り。無量の法財集めておいて。三つの根機を救
はにやならぬ。三つの根機の其中に。眞の種草を求
むるかをも。眞の種草が眞實欲しか。法窟の牙と奪命の
符と。鳥の兩羽を挾むが如く。是れが無ければ種草は出

主心お婆々野引歌

ふて庵を焼却す。
○疎山壽塔、乾峯
三種等白隠法師等に
に註せり。

○座禪和讃。禪は
梵語サヤトナ、即
ち禪那の略、靜慮
と譯す。靜坐して
冥想するの意、本
篇は禪の功德を讃
美せるものなり。
○長者の家の云云
法經華の童子の因
縁を引けり。
○六趣輪廻。六道
輪廻に同じ、前に
註せり。
○摩訶衍。梵語マ
ーハヤナの漢音、
譯して大乘とい

主心お婆々紛引歌

二二六

來ぬ。是れが即ち佛國の因。とりも直さず菩薩の
たどひ虚空は盡きやうと儘よ。こちの弘願は果しやない
頼入そよ千歳の後も。ひとりなりとも當家の種草。婆々
が心を能く參究せば。祖師の眞風は地におやせまい。
油斷めさるなちまめてござれ。婆々は是れから御殿申す。

坐 禪 和 讃

衆生本來佛なり
水をはなれて氷なく
衆生近きを不知して
譬ば水の中に居て
長者の家の子となりて
六趣輪廻の因縁は
閻路にやみちを踏そへて
夫れ摩訶衍の禪定は

水と氷のごとくにて
衆生の外に佛なし
遠く求るはかなさよ
渴を叫がごとくなり
貧里に迷ふに異ならず
己が愚痴の閻路なり
いつか生死をはなるべき
稱歎するに餘りあり

ふ。
 ○諸波羅密。波羅密は梵語、度と譯す。布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧これらを六度或は六波羅密といふ、これを以て生死海を度りて菩提の彼岸に達し得るの義なり。此の中定は禪定にて即ち坐禪にして、此の定波羅密が他の五度に勝れたるをいへり。
 ○無相の相實相は

布施や持戒の諸波羅密其品多き諸善行一座の功をなす人も惡趣いづくにありぬべき辱くも此の法をさんたん隨喜する人はいはんや自ら回向して自性即ち無性にて因果一如の門ひらけ無相の相を相として

念佛懺悔修行等皆この中に歸するなり積し無量の罪はらふ淨土即ち遠からず一たび耳にふるゝ時福を得る事限りなし直に自性を證すればすてに戲論を離れたり無二無三の道直し行も歸るも餘所ならず

無相なることをいふ。
 ○四智圓明。迷の八識を轉じて悟の四智を具足すること。
 ○蓮華國。極樂淨土其他の佛土を指す。

無念の念を念として三昧無碍の空ひろく此時何をか求むべき當所即ち蓮華國

謠ふも舞ふも法の聲四智圓明の月さねん寂滅現前するゆへに此身即ち佛なり

安心ほこりたゝ記

○安心ほこりたゝ記。安永三年出版したる此書の序に「此書をほこりたゝと、自己來源臘月八日の煤拂にして頼て西方淨土の春に立歸るべきころなるべし」云々とあり。師八十歳の時の作、京都西光寺の俊鳳和尚（淨土宗西山派の學者）に與へしもの。

歸命頂禮御釋迦如來。やれく皆さん聞てもくんない。おらが親仁を何國の御人も。悉多太子かしらぬが佛か。若い時から商ひ好にて。親の譲りの家も位も。すばんと打すて。十九の年から山へはいりて。迦蘭羅阿羅々の二人の仙人。師匠と頼みて。菜摘水汲薪を樵りてな。奉公勤めて元手を拵らへ。三十年目に初めて店出し。華嚴と名づけて結構な代呂物。賣てみれば。文珠と普賢の二人は買たが。あまり高くて其餘の御客は。盲か聾か見向

○歸命頂禮云云。以下釋尊を商人に譬へて、一代説法の次第をうたふ、○華嚴云云。釋尊一代の説法を分類して華嚴、阿含、方等般若、法華、涅槃の五つとなしこれを五時といふ、天台大師の分類なり。華嚴は成道の後三七日の間の説法をいふ。○阿含。増一阿含中阿含、雜阿含、

もせぬから。是れではいかぬと分別仕替て。阿含と名づけし安もの賣かけ。口上ひねれば。店ささせわしく。御客が來るやら得意が附くやら。そこで追々代呂物仕入て。商ひ手廣に方等般若に。法華涅槃と御客の機を見て。夫々あてがふ商ひ上手に。須達と名をいふどわらひ金持。滅法にほれ込み。祇園精舎と申す屋敷を。御釋迦にあてがひ。店出しさしたら。早速其名が諸方へひろまり。とつとも無いほど商ひ繁昌。天上天下に一人の親仁だ譽めても呉んない。其時妙法秘密の精藥。法華の一法盛んに流行て。御若い嬢さん龍女と申すが。これを買請とつく

長阿含の四經あり
 こは小乗卑近の教
 なり。
 ○方等般若。方等
 とは廣大の意味に
 して此の内には維
 摩、大集等の諸經
 を含む、般若は大
 般若經。
 ○龍女。八歳の龍
 女成佛の事、法華
 經の提婆品にあり
 ○韋提希夫人。摩
 訶陀國王類婆娑羅
 王の妃。此の人の
 請に依りて淨土の

り吞込み。成佛したとは。我等の嬬とはどららい違ひだ。
 又其の時。阿闍世と申した無敵の王様。提婆達多と心を
 合して。御釋迦の店をば仕舞てのけよと。己が母者人韋
 提希夫人を。牢屋へおしこみ。御釋迦の代呂物買はさぬ
 了簡。そこで夫人は。不樂閻浮と此世を厭ふて。智慧も
 元手もござらぬけれども。五障三從かなざる大病。なほ
 る薬があるなら下され。御頼み申すと。遙かに向ふて御
 願なされば。お釋迦は承知て五三の桐だよ。此の様なお
 客が大方あらうと。四十餘年の長の月日を。御藏へ納め
 て仕舞ふて置いたが。さらば是れから賣かけませうと。

既無量壽經は説か
 れたり。

○不樂閻浮。韋提
 希夫人が吾子の逆
 惡に依りて此の世
 を厭ひて、閻浮濁
 惡の世をれがはず
 と云へる文觀無量
 壽經に見ゆ。
 ○五劫兆載思惟の
 藥味云云。彌陀が
 衆生を救濟せんが
 ために五劫の間凡
 夫惡人の往生すべ
 き淨土につきて思
 考し、兆載無量の

阿難目連二人の手代を。左右に召連れ。王宮さしてな出
 現なされて。韋提希夫人に。彌陀の本願他力の稱名。五
 劫兆載思惟の藥味を。ひとつに合した六字の丸藥。一向
 專念産前産後にさし合ござらぬ。智慧も元手もさつぱり
 いらぬ。口に任せて唱ふるばかりだ。心想羸劣未得天
 眼。智慧が虚弱て元手のならない。御脉も見ぬいた五障
 の重病。まして難治の極重惡病。これらの性には。これ
 より外には用ゆる薬は。さつぱり無いぞと御勸めなされ
 た。夫人は元より五百の侍女まで。無始より以來さとり
 し罪業。煩惱疑惑の癩氣の持病に。三世の諸醫師もふ匙

年月間、修行したるをいふ。

○心想事成云云。

○觀無量壽經の文。

○阿耨多羅。阿耨多羅三藐三菩提の

ごに譯して覺といふ。さとりのこと。

○直指人身。前に註せり。

○御釋迦が莞爾と云云。靈山會上の

枯華微笑をいふ。

○本來面目無一物

自己本來の姿目、

を投げたり。其の場で現益阿耨多羅々々。汗が流れて即日平癒。なんと皆さん六字の丸薬用ゐてみなさい。元手のいらぬが肝心要だ。あんまり無造作で。店代呂物かちつくり疑ひ。何ぞ利口な物は無いかと知識に問ふたら。直指人心見性成佛。御釋迦が即ち莞爾と笑へば。迦葉が莞爾と笑ふた請うり。是れが本法一嗣相傳。實の眼を開いて見るなら。御釋迦も我等も是は何物。本來面目無一物とは。これはどえらい堀出し物だと。坐禪をはじめてやりかけましたが。膝がぶりくぶりつきますやら。眠が来るやら。背をどやされ大きな御目玉。爰がなんでも

即り佛性の相は如何、曰、無一物とは禪者の常套語。

○阿字本不生。密教の觀法をいふ。

○五智。四智（前に註せり）の外に

法界體性智を加ふ

○五大。四大（夜

船閑話に註せり）

に空大を加へたるもの。

○金胎兩部金剛

界、胎藏界の曼荼

羅をいふ。

辛抱所と。さばつて見たれば。三年むかしに隣へ借したる。黑豆三合糠一升。思ひ出して妄念山々。これも我等が性にあはねへ。商買かよふと眞言秘密を。どの様な物だと尋ねて見たれば。阿字本不生で。自身の胸にも阿字

が具はり。羅存は元より差別とわかれて。五智も五大も

金胎兩部も。此の胸一つで。父母の腹から生れた所が。

直に佛の位でござんと。聞くも其の儘。オンアボキヤな

どとやりかけたれども。元手も持たずに自力の商賣。阿

字なものにてサツバリ知れねへ。そこで圓頓妙法蓮華即

身成佛。扱ても無上の妙劑なれども。我等が根機に及び

安心ほこりたし記

一三五

○四十餘年未顯眞實。無量義經に出づ。釋尊が我四十餘年未だ眞實を顯はさず。と云へるを引く。

○鼠衣で云云。以下凡夫に戒法の保ち難きを説く

もないゆえ。題目ばかりの功能看板。読んで見たれど。元手が無いから代呂物買はれず。四拾餘年の未顯眞實。何の事だと求めて見たれば。六字の名號は法華經の略にて。藥王品には。妙典八軸吞み込む時には。西方極樂阿彌陀の淨土へ。生れてゆくぞと説てはあれども。何も勘定だ。廻りくって遠道せうより。路銀のいらぬ南無阿彌陀佛を願ふが近道。なんと皆さんさうでは無いかへ。鼠衣で二食でくらして戒行持つは。始末勘定利口な算用。しかし我等は。蚤も虱もとらずに置かねへ。手をば出して盗はせねども。心に欲しくて目かけは持ちたし。縛も

なければ子種がなくなる。虚もすこしは吐かねばならぬし。酒も飲まねば婚禮振れ舞。萬事の附合世間が渡れぬ。何と是れては五戒が持てぬ。外の商賣仕様がと思へば。根機と元手がなくては出来ねへ。どうしても親父の教へに歸りて。元手のいらねへ六字の商賣。我等が根機にしつくり合ます。併し元手が澤山あるなら。自力の商ひなされて御覽じ。細い元手ぢや一向いけな。棒でも折つたら。逐地も去地も茶の木畑で御迷ひなさろぞ。むかし咄しを聞ても見なさい。諸宗の祖師達。智慧も元手も澤山あれども。六字の藥を捨てはなさらぬ。まして

○石や瓦が云云。
凡夫が佛に成るは石が變じて瓦となるが如しさいふ經説を引く。近く親寫聖人の和讃に「瓦礫も金と變じける」云云とあり。

我等は。智慧も元手も根機もないから。自力の壁。他力の御船に乗るより外には分別ござらぬ。凡夫が其の儘佛になるとは。石や瓦が不思議に變じて黄金になるのだ。夫れが嘘なら御寺の坊様に尋ねて御覽じ。何と皆さん嬉しいこんだぞ。儒道や神道や心學なんどの。外商賣から商賣敵で。いろくさまく悪口いへども。我等が親父の老舗のあきなひ。格段違ふてどわらいもんだよ。根本本家は天竺横町。夫から唐土日本へ店出し。八宗九宗と弘めた代呂物。いやだといふたらそこらに居られぬ。恐れ多いが上々様でも。御用ななるゝ六字の丸藥。朝夕

忘れず用ゐて御覽じ。四海靜かに現當繁榮子孫長久。今世の祈禱も來世の利益も。是れに過ぎたる藥はないぞへ。虚はつかねへ是れ皆お釋迦の味噌では御座らぬ。本法の事だよ。ホ、ホイ、ホウく

明和 元申年十月

沙羅樹下 剛提翁述

寶鏡窟記

○寶鏡窟記。寶鏡窟は豆州加茂郡手石村附近の海中に在ること本文に記せるが如し。本篇は師が此の寶鏡窟に遊びたる紀行記なるべし。

○清淨法身。東坡の偈に、溪聲即是廣長舌、山色豈非清淨身。清淨法身とは宇宙に遍滿せる佛の本体をいふ。○慧眼。智慧の眼なり。

經に曰く、佛身法界に充滿してつねに一切衆生の前に示現すと、然らば即ち目の見る處總に是れ如來に清淨法身にあらずして何ぞや。しかるを都て見奉ること能はず、慧眼既に盲たる故なるべし。又曰く、我常にこゝに住してつねに說法して無數億の衆生を教化すと。しからは即ち耳の聞く處諸佛微妙の教體ならずして何ぞや。然るを都て聞奉る事能はず、天耳既に聾たる故ならずや。寛永の初め、豆州賀茂郡手石村の漁翁、つねに産業の拙き

を恨み、深く來生の苦輪を恐れ、晝夜に念佛して怠る事なし。自ら云はく、漁獵は我が家業なり、念佛は我が私業なりと。常に船上にありても、終夜念佛して動もすれば網する事もまた忘るゝばかりなりけり。いつの頃よりか貴き光の時に海面に浮ぶを見る、漁翁是を怪みて、船して彼の光の處に到れば、岩窟あり、廣さ二丈ばかりなるべし。遙に窟中を窮ひ望むに、昏々として淺深を計る能はず、潮に隨ふて開閉す、満る時は一片の水波窟中に充つ。一日、漁翁その潮勢のおつるを待ちて、畏づく彼の窟中に棹もて兩岩をさへへて進むこと數十笏、轉た

○笏。尺に同じ。

進めば轉たくらし、忽然として股戰さ膽震へ、心身驚き恐れて正に正氣を失せんとす。こゝにおいて合掌跪坐して念佛すること數十聲、身心次第に平穩なることを覺ゆ。少焉あつて、徐々として眼をひらけば、一遍の金光窟中に煥發して、瑞耀膽を照し、異香掬しつべし。熟らゝ見れば、無量壽尊及び二大士を左右に端嚴殊特の妙相有りて、紫磨金の聖容嚴然たり、窟中廣博なること大虚の疊廓たるが如し、如來の身量何千尺といふことを知らず。漁翁即ち念佛して身心共に消ぬ失せたるが如し、覺えず時を移すこと數刻、乍ち怒濤の岸を打つ聲を聞く、既に

○無量壽尊。阿彌陀佛をいふ。

○二大士、觀音、勢至の二菩薩をいふ。

○紫磨金。紫磨黄金の附。金の精純なる物。

して潮の洞口を塞がんとことを恐れて泣くく、尊容に別れ奉りて念佛しながら漕かへりぬ。扱て里人に斯くなん告げたりける程に、遠近驚き起ちて、潮の落ち、洞口の開くを待ちて行きて瞻禮する者ひきもきらず、正に窟中に入るに當りて、涕淚悲泣、感汗肌をひたし、念佛して伏しまろぶ者あり、打見て興ざめたる貌して守り居るもあり、怪しげなる貌して、彼方此方見まはし冷笑もあり、是れ皆信心の淺深、罪業の輕重に隨ふて所見まちくなる故なり。彼の涕淚悲泣する底は、如來の身量或は三尺或は五尺、乃至一丈乃至二丈、紫金光聚の中に嚴然とし

○紫金光聚。紫磨黄金の光をいふ。

て立たせたまふを拜し奉りたる者なり、是れ上品の行者なりと知るべし。又彼の打仰ぎてひたすらに念佛する底は、金色の聖容、或は五寸、或は七寸、さら／＼と照輝きて窟中に立たせたまふを拜し奉る者なり、是れ中品の行者なりと知るべし。興さめたる貌して守り居けるは、金光をも拜せず、寶薫をもきかず、混黒にくろく只だ燼木などのかくなる者、或は三寸或は五寸、目鼻の分ちもなくて、三つ並ひ立ちたまふを見をりて、さしてもなき事をぎやうさんらしく云ひ觸して、多の人々を救き貶して願がしめる事よ、憎き漁人めが仕業なるぞかしなど興

○斷見外道。色受想行識の五蘊は今世に滅して復た再生せずと計す、これを斷無の見といふ、所謂る獨斷なり、此の獨斷家を斷見外道と稱す。○慧心僧都。名は源信、横川の慧心院に住せしが故に慧心僧都といふ、寛仁元年六月寂。本文の語は其著往生要集にあり。○如來。過去の佛

さましたる者なり、是れは下品の行者なりと知るべし。又彼のうろ／＼として彼方此方見廻し冷笑けるは、無智昏愚の下郎、尋常に世を信せず、因果を知らず、少しばかり假名雙紙など讀み覺えて、荒唐の談を聞て物知りだてする斷見外道の部類なりと知るべし。神明にも尊ばれ佛陀にも憐まれ給ひにたりける慧心僧都の、大信は大佛を見、小信は小佛を見ると云ひ置かれけるは止事なく貴くも覺わらるれ。彼の人々の信根の淺深、罪業の輕重に隨ふて所見まち／＼なること、思ふに毫釐も差ふことなし。譬へば明鏡の臺に當つて、妍醜少しも遁れざるが如し。

の來たまへるが如く、此の佛も來たまふといふ義、佛のことなり。

○法身。報身。化身。これを佛の三身といふ。法身は宇宙界に遍滿して無色無形なる理佛報身は因位の願行の酬報して成就したる萬徳圓滿の佛化身は又は應身といひ此の穢土に化現して衆生を救ふ佛なり。

是の故に寶鏡窟と號し、鏡岩と名づく。近頃俗には彌陀窟といふ。或人の云はく、我れ聞く、如來は三身を具足したまふと。且つ夫れ寶鏡窟の如來の如きは、法身と云はんか、報身とせんか、將た又稱して化身と云はんか、如來既に群生を利濟せんが爲めに世に出現したまふとならば、城邑聚落いかにも人たち多かる處に現じたまひて、多くの人を利生したまふべきに、何ぞや、遠境邊土、人里もつゝかぬ處に雨をさけ、風を恐れ、しばらく潮の落るを待つなる危き岩穴の中に應現したまふことは何ぞや又聞く、番々出世の如來、何れも開佛智見道の一事を以

○開佛智見道。佛智を開いて道を見る、即ち菩提を得ることなり。
○三身。前之條を見よ。

て本懷としたまふと、しかるを獨り無量壽尊のみ往生淨土の事を以て我等を引導したまふことは何ぞや。予曰く。佛に三身あり、法身を以て體とす、報化の二身は用なり、今寶鏡窟の如來の如きは、法身と云はんも亦得たり、報化の二身と稱せんもまた得たり、天堂地獄、淨邦穢土、山河大地、佛界魔宮、草木叢林、有情非情、盡く是れ如來の眞法界、當所をはなれず、常に堪然たりといへども見性の上士に非ざるよりは、輒く見ること能はず、是の故に諸佛、報化の二身を現じて衆生を引導す、禪定誦經念佛持戒、分に隨つて進修して怠らざる時は、情念止み

○三昧發得。悟を開くといふに同じ
（圓解。圓滿なる智解。見解。）

○五眼。天眼、肉眼、法眼、慧眼、佛眼。

○四智。大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智これなり。迷の八識を轉じて得るもの。

○唯有一乘。法華經に、唯有一乘法無二亦無三と、こゝには此の上無き

といふ形容詞。

○來迎往生云云。

往生さいふも開悟といふを同一なるべきことをいふ。

○泥丸塑像。土木等にて造りし佛像をいふ。

○蛤蜊の胎中に云云何れも三十三觀音の一なり。

思想盡き、一心不亂の田地に到りて三昧發得し、圓解煥發し、乍ち如來の眞法身に契當す。此の時に當りて五眼俄に開明し、四智立處に成就す、是れ即ち開佛智見道の當體にして、見性入理の一刹那なり。思想盡き、情念休する時節を往と云ひ、一心不亂の田地に到るを生と云ふ。如上の眞理現前して、唯有一乘の大事、目前に分明なるを來と云ふ。此の時に當つて、行者心境不二、理智冥合するを迎と云ふ。然らば即ち、來迎往生、開佛智見、畢竟同一模範なる者にあらずや。須らく知るべし、三身不二、不二三身、三世古今の間に見性せざるの佛祖なく、

見性せざるの賢聖なきことを。禪定誦經、念佛持戒、皆是れ見性の助因なるべし、彼の黃卷赤軸を執らへて佛經なりと偏執し、泥丸塑像を執らへて佛像なりと心得む人々は、夢にも曾て見ること能はじ、是れ佛身の應現、豈また城邑聚落をしも云はんや。彼の觀世大士の如きは、蛤蜊の胎中に身を現じ、瓢瓠の肚裏に跡を垂れ、遠境邊土、金砂灘と云へる處の馬郎が小婦と身を現じ給ひ、又た海島邊鄙人多く住みける所に、念佛の魚と云へるありき。漁者共多く濱邊に打ち寄り、高聲念佛時を移し、皆々一心不亂に到りける時、魚ども多く海面に浮ぶ、此の

○無佛世界。佛教の行はれざる邊土の意。

○大悲善巧。佛の慈悲を以て衆生を救ひたまふ善巧なる方便。

時綱を下せば、夥しく魚を得、念佛の多少、聲の高下に随ふて魚を得ることもまた多少あり、是の故に此の處の民、念佛を以て家業の如くす、傳へて云ふ、此の魚、彌陀の化現にして、無佛世界の衆生を濟度したまはん爲めに、斯くの如きの善巧ありと。嗚呼、佛菩薩の大悲善巧は凡愚の計り知るべき事にしあらず、今此の寶鏡窟の如來も、行者罪障の輕重、信心の精麤に随ふて、品々に拜まれさせ給ふをおもへば、彼の島の念佛の魚に少しも違はせたまふことかは。熟らくと思ひまはせば、身の毛たちて恐ろしく尊くて、類に悲歎の涙こそこぼるれ。愚

老坏も是れよりは遙か遠國の者に侍り、此の御佛の尊き御有様をほのかに傳へ聞き奉りて、あはれ諸佛の冥助もおはせよかし、足を限りに彼の伊豆の國なる賀茂郡とかや云ふなる處までたどり行きて、彼の御佛の貴き御影なりとも伏しおがみ奉りて、後の世の事をも歎き申度き事と思ひつゝけて、いつしか廻國の姿にやつしなして漕ぎ來りて同行三五輩、海士の小船のあやしげなるを請ひ借りて、諸共に窟中に入り、念佛して伏し拜み奉りにけるに、目一目見奉りて、伏ししづみて念佛しながら、しくくと泣出すもあり、一目見奉りてより有難がりて風浪

するも有り、一人は興さめ貌して方くは何を目あてに感
 涙してさは泣き給ふぞ、おのれは唯だほのくらき斗りに
 て、物告を見つけ侍らね、如何にもしてかたしろなりと
 も見届け奉りて、和殿原が如く有難がり度き事よとて、
 目おし拭ひ首ひねりまはして、かなたこなたを見回し
 首を搔くもありけり。愚老が其の時拜し奉りたるは、ほ
 の暗き中に、彼の光のちら／＼とのみして、満月の御面
 も、青蓮目の御眸も見え分ち給はず、御佛の御影とおぼ
 しきもの三たり立ち給へるを拜み奉りて、少しは信心も
 さめ心地しけるが、定めて貴き事にやおはすらむと、有

○青蓮目。佛の御
 眸を形容して青蓮
 華の如しといふ。

○六趣。六道のこ
 と、前に註す。
 ○十力調御。前に
 出づ。

難たげに伏し拜みて念佛し侍にき。歸り來りて熟らく
 と思ひかこちにけるは、七句に近き者の遙々の旅路を、
 三途の罪障をも懺悔し、六趣の苦患をも歎き申度くて、
 さまよひ來りたる者を、御影をだにもはか／＼しく拜ま
 れさせたまはぬことよと、少しは恨み申す心地もさしお
 こりにたりしが、返へして思へば、三界無地の大聖、十
 力調御の如來にて渡らせたまふものは、如何にや憎愛差
 別の御心のおはすべきぞ。差別は卻て我か信心の深淺に
 こそ依るべき物を、淺猿しくも恨み奉りしことよと思ひ
 定めて、従前の罪障を懺悔し、當來の苦因を恐れて、至

○澆季末代。世の末と云ふに同じ

誠まことに專唱せんしやう稱名しょうめいすること半時はんじ、再度ふたたび彼の嚴窟げんくつに入り拜はいし申しけるに、光明くわうみやうも相好さうかうも以前いぜんには遙はるかに違たがはせたまひて、一際ひときはしめしやう殊勝しゆしやうにおがまれさせたまひける程ほどに、感涙かんでん肝かんに銘めいじ侍はべりき。是これより思おもひ入りて、澆季末代ぢやうきまつだい流轉常没りゅうせんじやうぼつの我等われらがためには、上うへもなき善知識ぜんちしきにてわたらせたまふものを。尊容そんように別わかれ奉たてまつりて、頼たのみもなき露命ろめいに何地いどこへかうかれ行くべき。永ながく此この處ところに有りて、尊容そんようにつかへ奉たてまつりて、兎とにも角かくにもなりはてたらんには、またなき勝縁しょうえんなるべき物ものをと、處々ところどころの靈場れいぢやうに詣まうで奉たてまつるべき望のぞみも絶たえ果はて、專唱稱名せんしやうしょうめいの外ほか、他事たじ無く打成うちなり侍はべりぬ。且かつ又國々またくにより

○一心不亂の田地。一心の不亂の境界といふに同じ。
○唯心の淨土、己身の彌陀。夜船閑話の註を見よ。

御影拜みえいがみ奉たてまつらむとて、慕したひ來きたり給たまへる人々ひと々の、浪風打なみかぜうちついきたる頃ころしき參まゐりあひたまひて、波風なみかぜの靜しづまるを待まちらわびたまへる人々ひと々のいたはしさに、打寄うちより念佛ねんぶつして浪なみの晴はれ間まを待まちたまへがしの心に、處々ところどころ勸進くわんじんし申まをして、一字いちじの草廬そうろを營いとなみ、形かたの如ごとく尊容そんようを寫うつし奉たてまつりて堂上だうじやうに安置あんし奉たてまつりぬ。願ねがはくは此この勝縁しょうえんに答こたへて、我等われらも及び一切いっさいの人々ひと々も、諸もろともに生死しやうじの魔網まもうを破やぶり、速すみかに一心不亂しんふらんの田地でんちに到いたりて唯心ゆいしんの淨土じやうどに生しやうじて、己心こしんの彌陀みだに値ち遇ぐし奉たてまつらむことを。

惟時寬延第三庚午歲佛生日。

沙羅樹下闡提老衲書

施行歌

○施行歌。施行とは慈善をいふ、本篇は師が諸人に施行を勧め、窮民を救への一助となさんために作られしものにして其の辭卑近なるも、佛教の三世因果の道徳を具體的に説明し此の道理に依りて慈善は却て我身に返り來るものなることなうたひ、愚民開導の一方便に供したるもの。

今生ふう貴するひとは
今生ほどこしせぬ人は
利口で富貴が成ならば
利口で貧乏するを見よ
未來は此世のたね次第
蒔たね大小あるゆゑぞ
よい種擇んで蒔たまへ
穀物取たるためしなし

前世に蒔をく種がある
未來は極めて貧なるぞ
鈍なるひとはみな貧か
この世は前世の種次第
富貴に大小あることは
此世は僅のものなれば
種を惜みてうへざれば
田畑に麥稗まかずして

施行歌

施行歌

麥稗取たるためしなし
五升や一斗は實るぞや
果報は倍々あるものぞ
果報も多しと計り知れ
施せよとすゝめたり
救ふこゝろを發すべし
有ば有ほどたらぬもの
持子が持ねば持ぬもの
持子はあつばれ持者ぞ
人を倒さず施行せよ

一五八

麥ひえ一升まさをけば
しかれば少しの施も
いはんや施多ければ
それ故も釋迦も觀音も
さすれば乞食非人まで
各々富貴で持たから
多くの寶をゆづるとも
少しも田畑ゆづらねど
我子の繁昌いのるなら
人を倒して持つ寶

我子に譲りて怨となる
ゆづる我子が沈みさる
筆の非道はしたまふな
あまり非道な利を取な
其身は三途に落入りて
非道は子孫の害となる
世間に數く有ものぞ
親が惡事をせぬゆるぞ
ますく重恩思ひしれ
あらひ風をも厭ひしぞ

施行歌

一五九

ひとの恨のかゝるもの
ますや秤やそろばんや
つねく商ひする人も
死んで三途に入る事ぞ
屋敷は草木が生しげる
親の惡事が身にむくふ
一門はん昌することは
もし又親にはなれなば
子を慈しむおやごころ
それ程親におもはれて

親を思はぬをろかさよ
鳶や烏に劣りたり
惜む寶はなき物ぞ
その金出して施行せよ
これに勝れる善事なし
死て身につく物はなし
捨て冥途の旅立ぞ
耳も聞わす目も見えず
闇を闇路に入ることぞ
とかく命のある限り

おやに不幸な人へは
娘むす子にしつけるに
親の後生のためならば
飢死ぬ人を助けなば
たとひ萬貫長者でも
妻も子供も錢金も
冥途の旅立するときは
行衛しらずに門を出で
その時後悔限りなし
菩提の種をそへたまへ

命はもろきものなれば
今宵頭痛が仕初めて
強い自慢をする人も
今日は他人を葬禮し
然れば頼みなき沙婆に
富貴さいはひある人は
貧者に施せぬ人は
狗でも口はすぐるぞや
慈悲善根をする人は
天魔外道はよりつかず

つゆの命となづけたり
さう死一生なるもあり
暮に頓死をするもあり
明日はわが身の葬禮ぞ
金銀たくはへ何にする
貧者に施せらるべし
富貴で暮す甲斐もなし
飢人貧者をたすくべし
神や佛に守られて
然れば祈禱に成せいか

能々料簡せらるべし
 餘りどう慾目にあまる
 くらすこゝろは鬼神か
 子孫繁昌長からじ
 施行で借錢しはじめよ
 上たる人をはじめとし
 われもくと共に
 貧者のいのち救ふなら
 平生貧者にうやまはれ
 ひとの喰物すつるのを

恵ほどこしならぬとは
 飢死ぬ貧者を見ぬ振に
 慈悲善根のなき人は
 寶は餘りはなきものぞ
 夫こそまことの信心よ
 頭だちたるひとくは
 厚く施行に身を入れよ
 廣大無へんの善事なり
 身につく果報有まいか
 好んで拾ふて喰ものは

前世に蒔種たらぬゆゑ
 かゝる有様見ながらも
 兎にも角にも人として
 この節信心あらねば

是非なく袖乞する事ぞ
 おのく仁心起らぬか
 信心なければ人てなし
 全く牛馬にことならず

寢惚之眼覺

○寢惚之眼覺。無明長夜の夢長く覺めず。受け難き人身を受けながら、何の爲す事も無く醉生夢死の生活を爲せるわれらは、師の所謂る寢惚なるべし。これに對して迅雷の一喝を與え、慧眼を開かしめんとせるものは此の篇なり。

○三教。神儒佛の三道。

先天元氣た事は何人も御嫌ひじや、嫌ふ筈じやよ良薬は。口に苦ふて眼が覺める。覺ては夢の邪魔になる。新たな事は皆々御好。浮た浮世にうかうか渡る世の橋を。渡る足どり雲踏ものよ。真中通れと口出しや成らぬ。道は廣いぞ眼を覺せ。御眼が覺ると大舞臺。ずんと變つた大仕懸。三千世界は一眼中で御座る。爰を觀せたい心願で。私しは御江戸へ出て來り。却説も御江戸の廣い事。古い三教捨置て、新たな葉道葉藝など、繁昌するのは大都會。

○無價の寶珠。貴重にして價も知れぬ位の寶珠といふこと。

○眼耳鼻舌身。これを五根といふ五官のこと。

斯る目出度御世なれば。幸はひ私が儲への。寶珠の新玉賣出と。此裏店を借まして。能價を待物ぞ。買や買。納めて櫃に有ぞかし。御好なれば尋て御坐れ。無價の寶珠の問屋で御坐る。買て用ひて御覽じろ。天地混沌未分より。現世の事は猶更に。過去や未來も手に取て。見るが如くで世の道理。邪正善惡明白に。神や佛も自在なるものよ。是は異神の妙術じや。千兩萬兩の金では行ぬ。儒者も佛者も是が種。種を知ぬと枝葉に走る。走る筈じよ眼鼻が邪魔じや。兎角眼耳鼻舌身を、頼みに思ふ其故に、本の主心は眞暗じや、儒者は文文を業となし。古人の粕

○主心。前の主心
お婆粉引歌を見る
べし。

○一以て之を貫く
論語里仁篇に載す
子曰參乎、吾道一
以貫之、曾子曰、
唯、子出、門人間
曰、何謂也、曾子
曰、夫子道忠恕而
已矣。とあり。

を拾ひ取。詩文作るも宜けれ共。役にも立ぬ世の章を。
滅太暴卒に書散し。先生顔も能出来た。孔子の旨は露知
ず。仁と天とに至りては更に夢中の夢助じや。折々講釋
する時は。己が智解の妄想で。文字の上を説散し。所謂
孔子の一以。之を貫ぬく杯どに至ては。口に任せて講釋
すれど。心眼清き上からは更に聞れぬ事ぞかし。學は只
放心を求むる耳ぞかし。多聞多藝は妄想の繁き種にて迷
ひが多ひ。學と云事外では無ぞ。己が心の喜怒哀樂。起
源。は何ぞ。眼耳鼻舌身仕ふ主。手足の動く功要は、何
の道理と學ぶが學よ。爰を悟れば自在な者よ。其處で一

○原の親父の隻手
の聲や、白隠和尚
の隻手の音聲のこ
と、前に屢々出づ

心定まりて。一身修まり家齊のふ。國も天下も治る本じ
や。是は誠の學問修行。どうぞ皆々御眼覺されよ。御眼
が覺ると天地の主じや。二六時中を自在に使ふ。爰を知
ぬと我慢が御坐る。爰を知らぬと不足が御坐る。爰を知
ぬと愚痴が有。爰を知ぬと危ひ者よ。今の佛者の修行を
見に。兎角俗情深きが故に名聞利欲を旨として。金の世
話やら地面の世話やら。中に下根の坊主杯。俗に劣らぬ
身持も御坐る。更に佛法地に落て。釋迦の本意は更々無
ぞ。原の親父の隻手の聲や。達磨九年の面壁や。粘花微
笑に至りては。思ひも寄ぬ事なれば。更りと西の海に捨。

檀那在家の機嫌を取て。世渡りするを専一と。中に佛經祖錄杯、邂逅見ても意は知ぬ、是も古人の粕を嘗、己が腹から出様に、談議說法するけれど、三毒五欲は胸に充煩惱妄想説散し、珠勝な顔で高坐に登、在家の男女を魔魅する様子、己が心に辱もせで。押の強ひも欲との談合。是所謂一盲衆盲を引て地獄の御案内。皆々御眼を覺されよ御眼が覺ぬと一生を。暗で暮して後の世は。閻魔の支配免れず。貴賤高下の隔て無。御油斷成被と獄卒の。杖下の御客で御坐るぞや。早く心を翻がへし。浮世の境に迷はぬ様に。己が生れた心の鏡磨き照すが肝要じや。此頃

○藥師如來。東方琉璃光世界の教主十二の大醫願ありて衆生を救濟す。

世上の流行にて。何にも知ぬ大俗は。神や佛を賣代なし、加持や呪なひ祈禱を致し、中に甚しき輩は、護摩を焼たりするも有。兎角新たに迷ひが起る。其處で浮世の憂人等は。何所の藥師は眼に能利益の。何所の地藏は疝氣に功能の。何所の觀音頭痛に功能の。爰の不動は何でも利益の。浮氣信心花見を兼て、心亂して願懸するは。欲に限りの無浮世。有が上にも亦貪欲や。能が上にも未不足。神や佛を頼だならば。己が氣儘に成か。無理な願ひの大妄想。神や佛に意が有ば。土石草木物謂筈じや。藥師如來と申すのは。一切衆生の煩惱妄想。療治致して心の

○地藏菩薩云云。本文は占察經疏に地とは即ち心地、能く載せ能く生ず藏即性藏、出すべく、内む可し云々と云へるに本づくものゝ如し。
○五行。周易にいふ木火土金水の五なり。

内の。惱除ひて救濟と。爰を表じた薬師で御坐る。地藏菩薩と申すのは。心地の地藏で御坐るぞや。心の奥の深ければ。無量不可思議なる故に。地に藏るゝと謂事で、容貌の柔和は即ち性は善也と。云に等しき事ぞかし。觀音菩薩と申すのは。音を觀との事ぞかし、是は即ち隻手の聲ぢや。爰を悟ると眼が覺る。御眼が覺ると世界一面觀音じや、今の流行の不動と云は。五行を表して作るぞや。左りの腕に掛たる繩は。一切衆生の煩惱を。縛り縛て動かぬ様に。右に持たる劍にて。一切衆生の妄想を。切て拂つて清めんと。後に火焰を付たるは。煩惱妄想燒

○閻浮檀金。又紫磨金といふ、寶鏡寫記の註を見よ。

盡し。足に踏だは大地で御坐る。一切衆生の煩惱の。起らぬ様に踏押へ。清き流れの瀧形取は。一切衆生の煩惱妄想。洗滌ひで清めん爲よ。暴惡異神の姿にて。左の眼は天を白眼み。右の眼は地を白眼み。凜と立たる大丈夫。浮世の境に迷はぬ譬へ。神や佛に容貌は無ぞ。容貌なければ俗には知ぬ。止こと得ずに容貌を表す。容貌に依な名に依な。依ば則ち迷ひなり。閻浮檀金の佛でも。地より起らぬ物は無。地は不淨の固じや。皆々御眼を覺されよ。御眼が覺ると天上天下。唯我獨尊外では無ぞ。是は肝心要の處。御臍の下へ力を入れて。己が心と云物を

○天竺國の御祖父
さん。釋迦牟尼佛
をいふなり。
○無我。「おれが」
の念無きをいふ。
○教の眼。佛教の
眼目なりといふこ
と。

尋て御眼を覺されよ。神や佛を拜すなら。心も清く身も
清く。其身能々這伏て。妄想煩惱起らぬ様に心静めて無
我に成との教へぞや。何程無病の人にて心も心に煩惱有故
に。胸に惱みの有物ぞ。是は衆生の持病で御坐る。爰を
救はん計りで。天竺國の御祖父さん。上無尊き身を捨て。
步行素足で御世話を爲さる。無我に成ても唯方に成な。
無我と云事外では無ぞ。己が拙なひ了間止て。天然自然
の理を守れ。是は教の眼で御坐る。兎角凡夫は私欲が深
い。惡事災難自ら招く。爰を能々分別成れ。若も自然の
天災有ば。神や佛を祈るも宜が。神や佛は願の的じや。

○腹を突出し云云
坐禪の状態なり。

○胸に妄想ある時
は云云。佛教にて
は迷は愚痴より來
る、愚痴なるが故

的に心を取れぬ様に。己が身體能堅め。心に餘念無様に。
腹を突出し身構へ直し。腹力強く息を込。心静かに緩々
と。狙ひ澄して放つ矢は。必定弛れぬ者ぞかし。心亂し
て放つ矢は。五尺の的でも弛れるぞ。向ふの的は鰯でも。
金の的でも何でも宜ぞ。當る處が肝要じや。爰を能々合
點爲れ。高天原も我心。彌陀の淨土も我心。清き處が神
佛の。宿る處で御坐るぞや。必ず心に惡心持な。嫉妬恨
みは地獄の元手。五欲妄想不淨の種じや。胸に妄想有時
は。心曇りて理が知ぬ。知ぬが故に迷ひが起る。迷ふが
故に損が有。神や佛に嫌はれる其處で聖人賢人も。いら

に道理を知らず、道理を知らざるが故に悟り得ずと爲すなり。

○天理。儒教にてはこれを人欲と對比して、天然自然に定まれる道理をいふ。理の字は元來玉理木理とて玉

ぬ御世話を申すなり。朝に道を聞て夕に死すとも可也とは。餘まり殘忍云様じや。迫て五年も十年も。生て此道行なふならば。嘸や樂しき事ぞかし。長ひ浮世に短かひ命。限り有身で御坐るぞや。浮氣せずと此事を。心に懸て御修ぎやうなされ。是は私しの御願ひじや。頼んだ連も徳は無。損徳論ぜぬ大道じや。徳と云事文字に書ば。直さ心と書ぞかし直さ心は天理で御坐る。是正直と申す也。主君有身は猶更に。心正して眞直に。己が勝手の無様に。惣身主人の物として。片片よらず偏よらず。天理を護る人ならば。是を忠義と申すなり。人と生れて大體

石の類に自然の筋目あるをいふ、天然自然に存せる宇宙の法則を理といふなり。

は。望み無身の無物ぞ。望み有とて大事が御坐る。忍の一字は成就の元手。爰を護るは大行じや。主君有身も無人も。貴賤高下の隔てなく。爰を護れる人ならば。天より福を下すぞや。正の字一止。一心に止れば。正しさと讀。其源を正し極る時は。一に止まるとの事なり。天高しと雖も踞まり。地厚しと雖ども荒く踏ず。大事小事より破れ。千里の堤も蟻の一穴より崩るゝと。物事輕卒なる時は。何事も成就せざる者也。皆々御眼を覺されよ。抑そも古今を考るに。唐も日本も此様に。治まる御世は無ぞかし。御仁徳天下に徧ねく。宮も葉屋も枕を高くの

天下泰平腹鼓み。狸の金玉八百丁。智者愚者共にぞよ
 し。茶屋船屋の奇麗は。極樂似ひの大地獄。多くの人の
 迷ひ込。留止の逼迫は難儀に及ぶ。浮世を恨む人も有。
 勿體無と云事知ぬ。知ぬが佛と申せとも。扱々御世話な
 佛達。人の教訓異見では。直らぬ事は知ながら。萬に一
 つも御用有ば。是は幸ひは有難ひ。長ひ事には御退屈。
 言度事は海山に。餘る妄想。芥子一粒に納めて見ば何も
 無。米や店賃當も無。止こと得ず筆を取。忙ひ師走に
 紛らかし。荒々颯と新玉の。御祝儀申述る也。
 惟圓融無相元年。眞如滿月。唯一乘日。本朝寛延第二

丁四月佛生日。理事無碍法界。無生國。不可思議郡。
 寂滅村。大惠平等山。諸法實相寺住持。夢幻院。電光朝
 露之弟子。空華坊入道題是。捨命拋身院。打成一片上人
 之弟子。無難坊純一訂正。法界山。一相寺。諸相非相和
 尚徒不動謹然。書是。

おたふく女郎粉引歌

女郎の誠とたまごの四角

みそかくのよい月夜

○おたふく女郎粉引歌。序文は當時世に行はれたる俚語を巧に綴り合はせて禪意を歌へり。○おたふく。お多福は東京あたりにてはおかめともいふ。本篇は諸行無常の道理より、浮世の果敢なく、迷の凡夫の憐れむべき様をうたひて、凡夫が直に直ちに佛となるべき禪道を勸

天ぢやくくと皆様おしやる。てんのとがめもいやでそろ。文のかづく戀ひこがれても。わしは當座の花はいや。數の男の思ひもこはい、見目の好いのも氣の毒じや。器量よしめと譽めそやされて。男ざらひのひとり寝を。命取りめと皆様おしやる。わしは命はとらぬもの。那須の與一は矢ささで殺す。おふくが目もとて人ころす。かつ

めたり。

○知音。知り合のこと。

の殿子がかぎりもないが。わしがいととはたひひとり。婆々が粉歌は面白かるが。ふくがしらへは知りやるまい。知音どしなら歌ふもよいが。やばな客には御遠慮めされよ。

○諸行無常云云。
諸行無常是生滅法
生滅々已、寂滅爲
樂、こは四句の偈
さて人生歡樂の永
からざるを痛み、
世相の常住ならざ
るを悲しみ、上求
菩提に進ましめん
とする佛教の根本
思想にして、法顯
譯の大般涅槃經
(縮長十の三三右)
に出づ。同經に釋
尊が因位の時此句
を聞かんため命を

捨てて本生譚ある
を以て「ちやつと
聽より首だけ舐り
云云といへり。
○地水火風の四大
萬物を形成する四
要素。前に註せり
○含藏識。第八阿
賴耶識。
○六つの衢。六道
のこと、前に註せ
り。

おたふく女郎引歌 一八〇
歸命頂來七佛傳來。我等の親玉釋迦牟尼如來も。僅と聽
くより首だけ舐り。戀にこがれて命も抛つ。肝心の小
歌の文句を。老男さん老女さん皆様聞ない。諸行は無常
じや。是生滅法。生滅滅已で寂滅爲樂と。有つても知れぬ
で弘法大師が。いろはにはへとにさばいて置かれた。夫
でもすめずば標木連坊主が。大小取難しやべるをさかん
せ。眞に浮世は墓ないものでな。人間萬物山でも川でも。
日月星辰竹木世界も。花咲きや散ります。盈れば虧ます。
生まれりや死にます。有るもの無くなる。それでも皆様
千年萬年。此の世に居るぞと思ふてござるが。うろく

する間に無常の嵐が。何處から來るやら俄に起ると。鬼
とも組むよな剛機な界も。天人見るよな美しい少女も。
出る息一回止るが境で。最早傍へもよられぬ容だよ。そ
こで地水火風の四大は。元へ歸つて無くなるやうだが。
さしひき残つて一つの含藏識。一生なしたる善業惡業。
これには本より形がないから。土にもならねば灰にもな
らねば。善業は善所へ惡業は惡所へ。幕が替りて衣裳を
著かへ。因縁次第で六つの衢の。天堂人間地獄や餓鬼趣
や。牛にも成つたり馬にも成つたり。死んだり生きたり
常まり無ければ。この道理で諸行は無常ぢや。是生滅

○華藏世界。大日
法身の淨土、言ひ
換ゆれば絶對界。
○無始劫以來。久
遠悠久なる昔をい
ふ。

法と申したものだよ。是れでは透切安氣はならぬと。佛
や菩薩の教に隨ひ、精しく進で修行に身をいれ。貪瞋痴
慢の根を斷枯して。六道生死の縁が切られるば。これが即
ち生滅滅己で。こゝに到ると此の身がこの世で。眞實無
相の安閑恬靜。月を枕に虚空に安臥。華藏世界を一と目
に見晴し。身心清淨諸境も清淨。寂滅爲樂と有るの
はこれらだ。そこで夫から御釋迦やあみだや。觀音地藏
と肩臂ならべて。誓願度生の手船に掉さし。十方世界に
神通遊化して。現世は勿論無始劫以來。父母兄弟伯父や
伯母の。六趣に迷へる苦患を救ふて。皆々安樂世界へ導

○人々御所持のこ
ゝるといふ奴云云
經に、心は巧なる
畫師の如し、能く
種々の五蘊を盡く
とあり。

き。生老病死の根も葉も拂ふて。七寶莊嚴の臺に坐せし
め。百味の飲食自然と備り。天の羽衣意のまゝにて。天
人聖衆と尋常伴ひ。微妙の音樂耳をば慰め。五色の天華
を詠めて遊ばせ。畢竟は佛にするじやが。何と皆様望
はないかよ。眞更否でも無いならさかかせ。人々御所持
の心といふ奴。これいと申してしつかと致した。目鼻も
手足もごんせぬけれども。偕てく自由なわろめでおじ
やるよ。佛も生み出す地獄も網みだす。それじやて皆様
油斷はならない。前にも云ふよに無常な浮世で。老男さ
や老母さは云ふにも及ばず。若い達者な息子も娘も直に

○餓鬼、修羅、畜生。三惡毒。
○財欲色欲。いづれも五欲の一

今夜が未來に成るやら。どうやらこうやら知らない身の上。浮假して居ちや不理ものだよ。否でも應でも忽ち此の世を。老も若さも振捨てゆくのを。承知で居ながら餘所目に見除けて。頭の髪から跟の跣まで。五欲を粧ふ心のすがたを。鏡に寫さば二た目と見られぬ。千萬劫にも得難き身を受け。人間世界へ生れて出ながら。餓鬼修羅畜生地獄の振舞。起つにも居るにも名聞我慢で。朝から晩まで晩から朝まで。高いも下いも財欲色欲。一心曇らにや明るい世界を。眞暗くら／＼闇黒境界。本來阿彌陀と同體佛をば。十惡八邪の不淨をぬり付け。渾然漫爾汚

○見惑、思惑、羅漢の位に見道位と修道位といふあり此の見道の障となる煩惱を見惑といひ、修道の障となるを思惑といふ、いづれも煩惱のことなり。

して仕舞て。我と我手に地獄をこしらへ。而て皆様御謂ます事には。惡事と申して人を殺さず。火付はせまいし盜は致さず。是等の外には有るまへなど。口さき計の理屈はよけれど。見惑思惑の微細の様子は。根から葉から御存知あるまへ。設ひ知つても行作が惡けりや。眞坂の時節に用には立つまへ。眞坂と申してどうした時なら。冥途の方から使の來た時。理屈でゆくななら何也斯也。言ひ分け斷り申して御みやれ。其の場に臨んで四も五も云はせぬ。時刻が移ると閻魔の目玉に。庇がつんでるなんど、旬り。忽ち未來へ引立て引くぞや。其の時皆さん

○斷見常見。前に註せり。
○世智辨。具に世智辨聰といふ、世の中の學問上の事には通じ居れども佛法は信ぜざる者なり。

一から十まで。周章騒いて胡亂たへ廻れど。泣くより外には仕様もあるまへ。夫から行くさまや何うなる處じや。どうでも大形好事あるまへ。自分の懐中自分に承知じや。御臍の下から算用して見て。心で意に異見を御謂やれ。薬を飲まない病人どもには。塗着扁鵲でも療治はとどかぬ。夫故佛も縁無き衆生は。濟度は成ぬの無佛性だの。何じやの角じやのと呵つて置かれた。無佛性とは如何なる人じやよ。斷見常見世智辨懈怠の。因果の道理を辨へ無くして。三毒五欲の我まゝ放埒。釋迦の教の十善五戒も。天照太神の六根清淨も。孔子の示しの五倫や五常

や。擲着没着言ひ捨て見捨てよ。用ぬ族を申したものだよ。是等の類が世間に多くて。夫故地獄が野多衢多繁昌。虎の皮をば禪に料めたる。赤鬼青鬼牛頭等や。馬頭等や。目にこそ見えぬと此の身に付さそひ。如何に貴き上々様でも。船頭馬子等も長者も乞食も。惡心邪惡の重いか輕いか。具に残らず鐵煉に記して。毎朝毎晩注進致せば。閻魔大王や十王其餘の。冥官皆々集り給ひて。御評議極れば命を奪取り。娑婆の親子や六親眷屬。別れを哀しみ歎くも厭はず。さあ來たく悲畏々々々々。悲畏火の車に引立て乗せ行き。葬津河原で裸にしんじまの